第４章　その他の評価項目

４－１　国際交流・協力について

４－１－１　アンケート用紙（隊員向け）

国際交流・青年育成に関するアンケート（１）

１．あなたは協力隊員として派遣することにより国際協力、仕事、人生、生活に対する考え方に変化がありましたか。	ア）ある イ）ない
内　容：	

２．あなたの現在のお仕事は、国際協力と関係のあるものですか。また、お差し支えなければ現在の仕事についてお聞かせ下さい。	ア）ある イ）ない
内　容：	

３．あなたは帰国後、仕事以外のボランティア活動などで、国際協力活動に参加しましたか。	ア）ある イ）ない
内　容：	

４．あなたの任地では、協力隊としての協力活動以外で行なった国際交流、例えばスポーツ大会などの開催・参加、語学の交換勉強会、料理教室などありますか。	ア）ある イ）ない
内　容：	

国際交流・青年育成に関するアンケート（２）

５．あなたは帰国後、任地で知り合った現地の友人、カウンターパートや村人と連絡をとっていますか。	ア）ある イ）ない
内　容：	

６．あなたは帰国後、協力隊のOB／OGと連絡、交流をしていますか。	ア）ある イ）ない
内　容：	

７．あなたは帰国後、協力隊の経験を活かして国内で行なった活動（例えば講演活動、協力隊候補生に対する任国事情説明など）の経験がありますか。	ア）ある イ）ない
内　容：	

８．３で「ない」と答えた方にお聞きします。要請があれば積極的に受けたいと思いますか。	ア）はい イ）いいえ
「いいえ」の場合、その理由：	

国際交流・青年育成に関するアンケート（３）

９．あなたは協力隊として活動していた時の自分の経験を家族や友人（協力隊参加者以外）に正式の形でなくても伝えましたか。	ア）はい イ）いいえ

10．９で「はい」と答えた方にお聞きします。あなたの経験を聞いた家族・友人の反応はいかがでしたか。
内　容：

11．協力隊活動を振り返って、あなたは協力隊参加して、どのような意味があったと考えますか。また、一番学んだことは何ですか。思い付くまま記述してください。
内　容：

12．あなたは、チャンスがあればもう一度国際協力活動に参加したいですか。		
ア）はい	イ）いいえ	ウ）現在参加している
理由／内容：		

13．あなたのご家族に協力隊の参加に対するアンケートを実施してよいですか。	ア）はい イ）いいえ

ご了承いただける方のご家族には別紙のアンケート用紙を送付させていただきます。

チーム派遣に関する質問

1．個別単独派遣ではなく、チーム派遣隊員として活動したことのよかった点、悪かった点を挙げてください。

2．協力隊をチームで派遣することの得失は何だと思いますか。

3．同様のプロジェクトを実施する場合、今後の協力の派遣形態について下記のうち妥当と考えるものを1つ選び、その理由を記載してください。			
A　専門家と各種の隊員が組んだこのようなプロジェクト派遣がよい	B　隊員だけのグループ派遣がよい	C　関係する専門の隊員の個別派遣がよい	D　どれとも言えない
理　由：			

4．事務局が将来チーム派遣を行う場合、提案がありましたら挙げてください。

プロジェクトに関する質問（１／２）

1．プロジェクト活動は成果があったと思いますか。下記のうち該当するものを一つ選び、その理由を記載してください。			
A　成果があった	B　一応の成果があった	C　あまり成果がなかった	D　成果がなかった
理　由：			

2．プロジェクト活動がニジェール国に及ぼしたと考える影響について対象ごとに記載してください（個人的見解で結構ですから自由に記載してください）。

対象区分	内　容
A　対象地の住民	
B　対象地の近隣住民	
C　郡レベル	
D　県レベル	
E　国レベル	

プロジェクトに関する質問（２／２）

３．活動期間中の事務局の支援体制は満足いくものでしたか。下記のうち該当するものを１つ選び、その主な理由を記載してください。			
A　満足している	B　まあまあ満足している	C　あまり満足していない	D　満足していない
理　由：			

４．活動期間中の事務所の支援体制は満足いくものでしたか。下記のうち該当するものを１つ選び、その主な理由を記載してください。			
A　満足している	B　まあまあ満足している	C　あまり満足していない	D　満足していない
理　由：			

５．活動期間中のニジェール国の支援体制は満足いくものでしたか。下記のうち該当するものを１つ選び、その主な理由を記載してください。			
A　満足している	B　まあまあ満足している	C　あまり満足していない	D　満足していない
理　由：			

ご　家　族　へ　の　質　問

別紙

1．ご子息・ご令嬢が青年海外協力隊員として派遣されたことにより、ご自身の国際交流及びニジェール・アフリカへの理解に変化がありましたか。あったとしたら、どのようなことですか。ご自由にご記入願い致します。	ア）ある イ）ない
内　容：	

2．ご子息・ご令嬢は、青年海外協力隊員として派遣されたことにより変化したこと（人間的、性格的など）がありますか。あったとしたら、どのようなことですか。ご記入願い致します。	ア）ある イ）ない
内　容：	

4－1－2　アンケート用紙（専門家向け）

チーム派遣に関する質問（1／2）

1．専門家（もしくはシニア隊員）と協力隊員が組む形のチームで派遣することの得失は何だと思いますか。

2．今後、カレゴロ緑の推進協力プロジェクトと同様のプロジェクトを実施する場合、派遣形態について下記のうち妥当と考えるものを1つ選び、その理由を記載してください。			
A　専門家と各種の隊員が組んだこのようなチーム派遣がよい	B　隊員だけのグループ派遣がよい	C　関係する専門の隊員の個別派遣がよい	D　どれとも言えない
理　由：			

3．事務局が将来チーム派遣を行う場合、提案がありましたら挙げてください。

4．専門家任期中、協力隊員チームとの活動での問題、障害等についた挙げてください。また、その解決のためにとった手段や方法についてお書き下さい（些細なことでも結構です）。

プロジェクトに関する質問（１／２）

1．プロジェクト活動は成果があったと思いますか。下記のうち該当するものを一つ選び、その理由を記載してください。			
A　成果があった	B　一応の成果があった	C　あまり成果がなかった	D　成果がなかった
理　由：			

2．プロジェクト活動がニジェール国に及ぼしたと考える影響について対象ごとに記載してください（個人的見解で結構ですから自由に記載してください）。	
対象区分	内　容
A　対象地の住民	
B　対象地の近隣住民	
C　郡レベル	
D　県レベル	
E　国レベル	

プロジェクトに関する質問（２／２）

３．活動期間中の事務局の支援体制は満足いくものでしたか。下記のうち該当するものを１つ選び、その主な理由を記載してください。			
A　満足している	B　まあまあ満足している	C　あまり満足していない	D　満足していない
理　由：			

４．活動期間中の事務所の支援体制は満足いくものでしたか。下記のうち該当するものを１つ選び、その主な理由を記載してください。			
A　満足している	B　まあまあ満足している	C　あまり満足していない	D　満足していない
理　由：			

５．活動期間中のニジェール国の支援体制は満足いくものでしたか。下記のうち該当するものを１つ選び、その主な理由を記載してください。			
A　満足している	B　まあまあ満足している	C　あまり満足していない	D　満足していない
理　由：			

4－2　アンケート集計結果

専門家	：	派遣数　3名	／	回答数　3名
隊　員	：	派遣数　33名	／	回答数　22名（内　派遣中隊員　7名）
家　族	：	送付数　10家族	／	回答数　8家族

Ⅰ．国際交流・協力に関するアンケート

1．あなたは協力隊員として派遣されたことにより国際協力、仕事、人生、生活に対する考え方及び人生観に変化がありましたか。	ア）ある	19
	イ）ない	3

2．あなたの現在のお仕事は、国際協力と関係のあるものですか。また、お差し支えなければ現在の仕事についてお聞かせ下さい。	ア）ある	9
	イ）ない	5
	未選択	1

OB／OG 隊員のみに質問

3．あなたは帰国後、仕事以外のボランティア活動などで、国際協力活動に参加しましたか。	ア）ある	6
	イ）ない	9

OB／OG 隊員のみに質問

4．あなたの任地では、協力隊としての協力活動以外で行なった国際交流、例えばスポーツ大会などの開催・参加、語学の交換勉強会、料理教室などありますか。	ア）ある	15
	イ）ない	7

5．あなたは帰国後、任地で知り合った現地の友人、カウンターパートや村人と連絡をとっていますか。	ア）ある	9
	イ）ない	6

OB／OG 隊員のみに質問

6．あなたは帰国後、協力隊の OB／OG と連絡、交流をしていますか。	ア）ある	14
	イ）ない	1

OB／OG 隊員のみに質問

7．あなたは帰国後、協力隊の経験を活かして国内で行なった活動（例えば講演活動、協力隊候補生に対する任国事情説明など）の経験がありますか。	ア）ある	13
	イ）ない	2

OB／OG 隊員のみに質問

8．3で「ない」と答えた方にお聞きします。要請があれば積極的に受けたいと思いますか。	ア）はい	4
	イ）いいえ	2
	未選択	3

OB／OG 隊員のみに質問

9．あなたは協力隊として活動していた時の自分の経験を家族や友人（協力隊参加者以外）に正式の形でなくても伝えましたか。	ア）はい	15
	イ）いいえ	0
派遣中の隊員向け質問 あなたはこれまでの自分の経験を家族や友人(協力隊参加者以外)に伝えましたか。	ア）はい	5
	イ）いいえ	2

10．9で「はい」と答えた方にお聞きします。あなたの経験を聞いた家族・友人の反応はいかがでしたか。

11．協力隊活動を振り返って、あなたは協力隊参加して、どのような意味があったと考えますか。また、一番学んだことは何ですか。思い付くまま記述してください。

12．あなたは、チャンスがあればもう一度国際協力活動に参加したいですか。	ア）はい	14
	イ）いいえ	2
	ウ）現在参加している	5
	未選択	1

13．あなたのご家族に協力隊の参加に対するアンケートを実施してよいですか。	ア）はい	10
	イ）いいえ	2
	未選択	3

Ⅱ．チーム派遣に関する質問

1．個別単独派遣ではなく、チーム派遣隊員として活動したことのよかった点、悪かった点を挙げてください。

2．協力隊をチームで派遣することの得失は何だと思いますか。

3．同様のプロジェクトを実施する場合、今後の協力の派遣形態について下記のうち妥当と考えるものを１つ選び、その理由を記載してください。

	隊　員	専門家
A　専門家と各種の隊員が組んだこのようなプロジェクト(チーム)派遣がよい	14	2
B　隊員だけのグループ派遣がよい	2	0
C　関係する専門の隊員の個別派遣がよい	0	0
D　どれとも言えない	6	0

4．事務局が将来チーム派遣を行う場合、提案がありましたら挙げてください。

Ⅲ．プロジェクトに関する質問

1．プロジェクト活動は成果があったと思いますか。下記のうち該当するものを一つ選び、その理由を記載してください。		隊員	専門家
	A 成果があった	8	2
	B 一応の成果があった	13	1
	C あまり成果がなかった	0	0
	D 成果がなかった	0	0
	未選択	1	—

2．プロジェクト活動がニジェール国に及ぼしたと考える影響について対象ごとに記載してください（個人的見解で結構ですから自由に記載してください）。

対象区分	内容
A 対象地の住民	
B 対象地の近隣住民	
C 郡レベル	
D 県レベル	
E 国レベル	

3．活動期間中の事務局の支援体制は満足いくものでしたか。下記のうち該当するものを１つ選び、その主な理由を記載してください。		隊員	専門家
	A 満足している	3	0
	B まあまあ満足している	8	2
	C あまり満足していない	5	1
	D 満足していない	1	0
	未選択	5	—

4．活動期間中の事務所の支援体制は満足いくものでしたか。下記のうち該当するものを１つ選び、その主な理由を記載してください。		隊員	専門家
	A 満足している	1	2
	B まあまあ満足している	6	1
	C あまり満足していない	7	0
	D 満足していない	2	0
	未選択	5	—

5．活動期間中のニジェール国の支援体制は満足いくものでしたか。下記のうち該当するものを１つ選び、その主な理由を記載してください。		隊員	専門家
	A 満足している	0	0
	B まあまあ満足している	8	1
	C あまり満足していない	7	2
	D 満足していない	3	0
	未選択	4	—

Ⅳ．ご家族への質問

1．ご子息・ご令嬢が青年海外協力隊員として派遣されたことにより、ご自身の国際交流及びニジェール・アフリカへの理解に変化がありましたか。あったとしたら、どのようなことですか。ご自由にご記入願い致します。	ア）ある	5
	イ）ない	1
	未選択	2

2．ご子息・ご令嬢は、青年海外協力隊員として派遣されたことにより変化したこと（人間的、性格的など）がありますか。あったとしたら、どのようなことですか。ご記入願い致します。	ア）ある	3
	イ）ない	2
	未選択	3

４－２－１　アンケート結果：隊員

Ⅰ．国際交流・協力に関するアンケート

１．あなたは協力隊員として派遣されることにより国際協力、仕事、生活に対する考え方及び人生観に変化がありましたか。

ア）ある　：　19　　イ）ない　：　3

内　容：

・仕事が農業関係につきたくなり普及員になった。
・国際協力というよりも日本がどう思われているかを知り、日本の良い点が目につくようになった。
・生活面では海外の情報に良く気がとまるようになり話題にするようになった。
・人生観を変えるほどの大きな変化はなかった。
・色々な意味で今後も国際協力の世界で生きていく自身を持つことができたし、勉強にもなった。
・特に帰国後、経験豊富な諸先輩方との交流から、隊員時の活動を自分なりに分析できるようになった。
・全ての面で大きな影響を受けて、人生観や物事の価値判断基準や、現在の自分と将来の目標など、参加の前後で大きな変化があった。
・日本の豊かさと、でもそれはどこか歪んだものであることを知った。
・生きている限りは精一杯楽しく生きようと思った。
・お金や物をあげる以外の援助の難しさを知った。
・国際協力の現場に対する考え方が深まった。
・現場の人々の葛藤、制度・組織の問題などは協力隊活動を通してより良く理解できるようになった。
・協力隊に参加するまでは学生だったので、仕事や生活に対する考え方もより現実的なものになった。
・人生観の変化について自分自身は自覚できないが、大きな軌道修正はないけれどもより現実に即したものの考え方ができるようになった。例えば、仕事をしているときは本を読む時間がないので、徹夜をして読むのではなく、土曜日、日曜日にまとめて読む時間を取る、といった常識的なことを即座に判断して実行に移すことができるようになった。
・なにかしら自信がついた。現地は苦しかったからね。そんな中で生きていたんだから。
・新聞やテレビ等で見ていた途上国と呼ばれている国々の印象が変わった。
・生活習慣、気候、考え方、宗教等の違う国で 3 年間比較的長期にわたり生活することで物事に対する考え方が変わった、と思う。
・人生観の変化とは言わないまでも、小さな事、些細なことでは動揺しなくなり、「ニジェールの農民に比べたらこれぐらい楽勝」とこれまでになかった比較対象の座標ができ、「何とかなる」と心に余裕ができた。
・伝染病などで幼い子ども、お年寄りが薬を買うお金や栄養が十分でなくたくさん亡くなった。プロジェクトの野菜分野のガルミオニオンの活動の収入で薬が買えたという話を聞いたり、生活か豊かになったという話を聞くと彼らの友人として役に立てたことは誇りに思うし、一生この分野でやっていきたいと考えるようになった。
・初代の専門家からその人間性を含め、心のこもったあたたかい活動を学んだ。
・人間がまるくなった。
・国際協力については隊員となる前から関わりを考えていたので特に大きな変化はない。但し、実際に国際協力に携わってみてその難しさを感じている。人道的な意味での国際協力については理解し易いが、政策的なものとなった場合の国際協力には多少の戸惑いを感じている。
・日本の文化、日本人ということに対して深く考えるようになった。
・協力隊として派遣されることによって、国際協力に対する知識・理解が大きく広がったと思う。それまで文でのみ

の関係から実際にふれてみることができた。

・仕事に対しては、責任あることをしようと思うようになったと思う。

・この国に来てまったく日本と異なる考え方にふれたおかげで、考え方見解の領域が広がったように感じる。この国では色々な考えにふれることができた。これは人生に大きなプラスと感じる。

・生活や人生観にはあまり変化はない。

・これから先の仕事を考える時に、以前より考える幅が少し広くなってると思う。

・仕事・生活に対する考え方等には特に変化は無い。

・国際協力に対しては以前から興味があり、また協力隊に退職参加したため、派遣前より考えるようになった。

・私の協力隊参加の中で一番の目標というのがこれでした。ただ、どのようにと聞かれると自己分析がしっかりできていないため、うまく言えませんが、変化があったと思っています。

・生活に対して、人間はどんなところでも生きていけるのだなと思い、今までの生活がいかに恵まれたものであったかを知ることができた。これからは日々の生活（恵まれた生活に）感謝しながら生きていけそうである。

・特に考え方や人生観が変わるようなことは何もなかった。

・国際協力の難しさ（杓子定規のない、本質の見えないもの）を身をもって悟った。

・協力隊活動は、私に様々な変化を与えた。私にとってニジェールが始めての海外であったが、自分が今までどれだけ狭い世界の中で生きてきたか、また、日本以外の場所でやれることの可能性がどれだけあるかということを知ることができた。協力隊に参加する前、私は流行を追い、おしゃれにお金をかけるごく一般的な学生であった。豊かな生活が当たり前の世界から、物資の少ない、あるいは品質のあまりよくない世界への突然の環境変化であったが、アフリカでの２年間はあるものをうまく利用する術、あるいは、ないものを自ら作り出して生活するという独創性を身につけさせてくれたと思う。帰国後は、一時的な満足感を得られるだけのものにはお金をかけなくなり、この点に関して、価値観は大きく変わったと思う。

・まず、西アフリカの国に対する興味が常にあり、新聞等で西アフリカ地域に関する事項が掲載されていれば必ず目を通すようになった。現在の仕事も西アフリカで行なっている。協力隊に行ったことにより、JICA の国際協力（ODA）に関して少し興味を持ち始めた。

・協力隊に参加する前にも途上国の社会や人々の生活に興味を持っており、しばしば旅行をすることはあったが、協力隊に参加して任国（特に農村）で生活していくことは全く異なることだと知った。日本の現状を考えるとどちらが幸福であるかはわからないが、任国の人々が現状を変えようとする意識があるのであれば、少しでも加担できればと思った。また、協力をするということは以前考えていたほど決して容易なものではないと感じた。

・村の中で現地の人とともに２年間暮らし、協力活動に関わったことによって人生が大きく変わったと思います。国際協力の対象者はとても身近な存在であり、私でも必要とされる人間であるということ感じ、今後もこの仕事を続けたいと思うようになりました。生活面でも人間としてとても大切なこと（家族のきずな、子どもと大人の役割など...）をたくさん学びました。

２．あなたの現在のお仕事は、国際協力と関係あるものですか。また、お差し支えなければ現在のお仕事についてお聞かせ下さい。

ア）ある　：　9　　イ）ない　：　5　　未選択　：　1

内　容：

・福岡県職員（農業職採用、農業改良普及員）

・緑資源公団（旧農用地整備公団）海外事業部の嘱託職員として、公団が農林水産省からの補助金を受けて実施している「砂漠化防止対策技術開発調査」の調査団員として植林分野を担当している。ニジェール、ブルキナファソ、

マリで調査を行なっている。

・農作業やアルバイト（塾講師）など。協力隊参加後はどんな分野に携わろうと国際協力関わりがあると考えている。

・富山県職員（林業職員として治山工事を担当）

・早稲田大学アジア太平洋研究センターで国際関係論専攻分野の助手を務めている。専門分野は文化人類学と公共政策論で開発援助研究、アフリカ地域研究と合わせて研究活動を行なっている。センターの業務内容は、自分の研究を遂行する以外に教官の研究活動の補助、プロジェクト研究業務の補助、大学院学生指導、各種センター行事を業務補助などとなっている。

・JICA 専門家業務調整員としてマダガスカルに赴任している。職務は主に専門家業務のサポート、日本大使館及びマ国各省庁と JICA 本文の調整業務を行っている。

・UNV 登録中である。

・JIFPRO にて林業 NGO 等への支援等。

・JICA 専門家としてセネガル総合村落林業開発計画に従事している。森林・自然環境協力部のプロジェクト技術協力で、3名の専門家が派遣されている（いずれも隊員 OV）。このプロジェクトは単に植林を推進していくものではなく、村落振興により地域住民の向上・改善のためのモデルとなるものの作成を目指している。ある意味ではカレゴロのプロジェクトと類似している。このプロジェクトにおいて村落林業を担当し、アグロフォレストリー、農地保全などの活動を計画している。

・現在は無職で、アメリカの大学院への進学に向けて準備中である。アメリカで修士号取得後は、再び国際協力の分野（特に自分の専門である林業分野）で活躍したいと考えている。

・緑資源公団にて海外業務の現地調整役。

・現在は療養中であるため 仕事 というものを遂行できる状況ではないが、フランスにてフランス語を学んで上達に努めている。将来的に国際協力への貢献も含めて役立てたいと考えている。

・現在2年間の国連ボランティア活動を終え、今後もこの分野で働くべく、大学院への留学を計画中です。

3．あなたは帰国後、仕事以外のボランティア活動などで、国際協力活動に参加しましたか。

ア）ある　：　6　　イ）ない　：　9

内　容：

・育てる会のアルバイト。

・国際協力や国内協力などの言葉の表現の違いはあれど、内容に大差ないと思うので数多すぎて書けない。

・各種 OB/OG 会への参加。

・協力隊募集説明会に隊員 OB として体験談を語る仕事に参加（1999 年度秋募集 3 回、2000 年度秋募集 2 回）。

・青年海外協力隊神奈川県 OB 会ウェーブの会主催の学校国際協力会への協力活動（1999 年度 3 回、2000 年度 2 回）。

・帰国隊員支援プロジェクトの支援でタマネギの研究をした。

・国内では OB 会の活動にできるだけ参加し、クロスロードへ投稿することをはじめ、千葉日報などニジェールで学んだことを発表した。

・JOCV 事務局の推薦で広島の小学生をはじめ千葉の文化講座、中学校の文化祭（サーモンキャンペーン）などで講演した。

・西アフリカで活動している NGO の活動に参加している。マリで活動している CARA、サヘルの森、ブルキナファソとチャドで活動する緑のサヘルなど。

・サヘルの森（マリ共和国で植林活動を実施している NPO 団体）の「乾燥地における植林」に関するセミナーに参加。

・シニア隊員（短期緊急）として再びニジェールへ赴任し、ポリオ根絶対策計画に参加した。政府保健省予防接種計画局にて JOCV 隊員がポリオ根絶計画にどのような形で参加してゆけばよいのかを具体的に考案してきた。これから本格的に隊員が入り具体化していく直前に大変残念ながら病気療養することになってしまった。

4．あなたの任地では、協力隊員としての協力活動以外で行なった国際交流、例えばスポーツ大会などの開催・参加、語学の交換勉強会、料理教室などありますか。あったとしたらどのようなことでしたか。お聞かせ下さい。

ア）ある　：　15　　イ）ない　：　7

内　容：

・現地のタイコの先生にアフリカのタイコを習った。
・他の協力隊員と協力し合って植樹際を行ったことなどのイベント（苗木配布、植樹、相撲大会、映画上映会）、空手指導（果樹隊員による）、夏休み工作教室（技術科教師による）、手芸教室（村落、手工芸隊員が中心）など、他にも多数実施した。
・4ヶ村対抗ちびっ子相撲大会を（2～3回）開催した。
・年1回駐ニジェールアメリカ大使館主催のソフトボール大会に3回参加（1996～98年）。
・毎週日曜日にヨーロッパ連合関係者が主催するランニング大会「ハッシュクラブ」に時折参加。
・初代隊員であったこともあり、生活、仕事に追われ国際交流に時間を割く余裕がなかった。
・村の子どもたちに3年の任期のうち2年間、月～木毎日30分～1時間剣道教室を開いていた。
・剣道を教えた子どもたちが学校へ行っていなかったため文字を書くことを年長の子どもたちと教えた。
・村対抗ニジェール相撲大会。
・ニジェールでは8月3日が緑の日（独立記念日）として植林推進のための行事が各地域で実施されている。プロジェクトでは植林推進啓発活動の一つとしてこの日に村の青年などの参加によるニジェール相撲の大会を行なっている。
・国際協力は、毎年行なわれるアメリカ大使館主催のソフトボール大会に参加。
・まれに申し込みがあるサッカー大会などである。
・ニジェールの北方遊牧民族であるトアレグ族の文化や言葉に非常に興味があったため、彼らと積極的に交流し、彼らの言語であるタマシェク語を学んだ。ダンスが趣味だったので、音楽隊員に誘われ、現地歌手のプロモーションビデオ・CM に参加した。
・相撲大会。プロジェクト事務所近隣4か村の子どもたちを集め子ども相撲大会を行なった。

5．あなたは帰国後任地で知り合った現地の友人、カウンターパートや村人と連絡をとっていますか。よろしければ、連絡をとっている内容をお聞かせ下さい。

ア）ある　：　9　　イ）ない　：　6

内　容：

・年賀状を現地コーディネーター等2人に送った程度。
・手紙のやり取りが主。
・2000年1月から3月まで、仕事で再び活動現場を訪れ、2ヶ月あまりもとの任地の村で生活させてもらった。
・プロジェクトのカウンターパートが JICA 研修で訪日した際は大阪、鳥取でアテンドした。
・元水利環境大臣（現地での父親代わり）とその息子さん（現地でのフランス語の先生）と E メールなどで連絡を取り合っている。

・国立農業研究所の何名かの研究員とはガルミオニオンの普及について連絡を取り合っている。
・お世話になった人への手紙。
・カウンターパートであったコビカ氏とは手紙のやり取りがあり、また仕事の関係でニジェールに行った時などコビカ氏の他、現地森林官であったウスマン氏や活動していた村を訪問し村人ともあっている。
・プロジェクトの現地コーディネーターである Hamidou KOBIKA 氏は、活動中様々な助言を与えてくれ、同僚のような、上司のような存在であった。彼は2年間の活動内容とその成果をよく知ってくれているため、現在進学先への出願書類の一部である推薦状の執筆をお願いしている。
・日本の様子とニジェールの様子（いわゆる手紙）。
・シニア隊員として再び任国へ赴任したので、その際にもかつてのカウンターパート、友人など多くの人々と再会することができた。隊員時代より連絡を取り合っている人については、現況報告がほとんどで、健康状態や共通の知人の話題、任国の社会的状況（給料の支払い問題）などが多かった。
・現地の友人及びカウンターパートと手紙の交換をし、近況を知らせ合ってます。

6．あなたは帰国後、協力隊の OB/OG と連絡、交流をしていますか。とっているとすれば、内容をお聞かせ下さい。

ア）ある　：　14　　イ）ない　：　1

内　容：

・結婚相手は OG です。他にもニジェール隊員の福岡にいる人達と連絡をとり2ヶ月に一度ぐらい合っています。妻の同国隊員とも会っている。
・進路の相談。現職の前任者がカレゴロの OB であるため、仕事上の相談。
・各種 OB ・ OG 会活動への参加を通して（京都府国際交流協会、京都府北部国際交流協会など）。
・世間話や近況報告。
・同期隊員 OV とは定期的に夕食会、同派遣国隊員 OV とは夕食会以外にメーリングリストに参加、またプロジェクト隊員 OV とは年1回の懇親会に参加している。
・H8.1 次隊の駒ヶ根訓練所フランス語クラスの同窓会（年2回程度）。
・プロジェクトチームの同窓会（年1回）。
・内容は特に近況の連絡等。友達としての付き合い。
・関東の隊員とは個人的にときどき会っている。
・飲んで騒ぐ。
・隊員 OG と結婚した。
・任期を延長したため多くのニジェール OV と飲み会または手紙・メールでのやり取りを行なっている。また、仕事の関係から海外、特に西アフリカの OV とあう機会もあり交流を深めている。緑のプロジェクトに関しては 1999 年に第1回の OV 会を開催した。また同期（3－3）の OV とも手紙のやり取りを行なっている。
・帰国直後は、同期や同任国 OB/OG で集まり、任国の出来事や、逆カルチャーショックなどの話にはなを咲かせていたが、帰国してしばらく経ち、それぞれが仕事や進学先などを決め、忙しくなってくると、なかなか会う時間が取れなくなってきた。最近は、特に親しい友人とメールで近況のやり取りを行なうのみである。特に私は、現在、仕事も進学先も確定しているわけでもないので、なかなか近況報告さえもしづらく、怠りがちである。
・情報交換。特に海外で仕事をしている、しようとしている人たちとの間で。
・同じ任国だった OB/OG については自宅の近辺に在住する場合は出会ったり食事をしたりする機会はあるが、遠隔地だとそれほど容易ではない。最近は E メールの発達で地球の裏側にいる人とも毎日のようにやり取りできるので

E メール開設とともに再び連絡を取り合いたい。現在はパリにいるため任国から日本へ帰国する隊員や出張でのOB/OG にかなり頻繁に会う機会を得ている。

・近況、仕事の話、他隊員の近況等々。

7．あなたは帰国後、協力隊の経験を活かして国内で行なった活動（例えば講演活動、協力隊候補生に対する任国事情説明など）の経験がありますか。

ア）ある　：　13　　イ）ない　：　2

内　容：

・北九州の小学校でニジェール紹介、仕事の内容、タイコの演奏を行なった（2クラス合同、2時間程度）。

・FM 富士に出演、外務省経済協力局長との会食、国際協力 NPO からの講演依頼。

・近くの小学校、中学校、大学などでの講演活動。

・プロジェクトカウンターパート訪日時に、一般市民向けのニジェール紹介。

・農業だ学校での体験発表会（JICA 大阪支部主催の特別募集説明会）。

・協力隊を育てる会総会において活動報告。

・協力隊募集説明会において活動報告。

・地方新聞へ体験談を寄稿。

・平成 11 年度第 1 次隊プロジェクト候補生に対するプロジェクト派遣及び任地事情説明。

・地域の青年会議所での講演会。

・職場の互助会主催の文化祭での写真展示。

・県庁主催（総務庁後援）の講演会にパネラーとして参加（講演内容は女性の社会への参画）

・できるかぎり積極的に参加している。

・立川の中学校でニジェールの生活について話をした。

・協力隊候補生に対する任国事情説明、協力隊募集時の説明会への出席の経験がある。

・1999 年 9 月：駒ヶ根訓練所にて訓練生にニジェールの任国事情、1999 年 10 月：母校の大学（日本大学生物資源科学部森林資源学科）のセミナーで講演、2000 年 3 月神奈川県 OB 会の委託を受けて町立山北中学校で講演。

・市の広報への寄稿（現地での活動についての紹介）。

・協力隊募集説明会に一度協力した。

8．3で「ない」と答えた方にお聞きします。要請があれば積極的に受けたいと思いますか。

ア）はい　：　4　　イ）いいえ　：　2　　未選択　：　3

「いいえ」のばあい、その理由：

・積極的とはいかない。現在の仕事に負担がなければ考える程度です。

・日々忙しい（余裕がない）。面倒くさい。都市へ出るのに時間とお金がかかる。

・知識も技術も足りないため、要請されることがないので「もし要請があったら...」と考えることができません。

・時間、内容が合えば。

・受けたいと思うが時間がない。報酬があるならそっちへいく。

9．あなたは協力隊として活動していた時の自分の経験を家族や友人（協力隊参加者以外）に正式の形でなくても伝えましたか。

ア）はい　：　15　　イ）いいえ　：　0

派遣中隊員向け：あなたはこれまでの自分の経験を家族や友人（協力隊参加者以外）に伝えましたか。
ア）はい　：　5　　イ）いいえ　：　2

10. 9で「はい」と答えた方にお聞きします。あなたの経験を聞いた家族・友人の反応はいかがでしたか。
内　容：

・「すごい」「がんばれ」等のほめ言葉が多い。
・そのちょっとの勇気が普通の人にはできないなど言われる。
・悪く思う人はいなかったと思うが、悪く思う人はもともと友人になりにくいと思うのでよい反応が多い。
・活動に関して詳しく話した事はないが、村での生活のことを話したときはみんな驚いていた。感心もしていたし、そういう生活環境の中に2年間居たことだけで、尊敬してくれる。こちらとしては何でもないことなのであるのだが。
・興味の深さや内容などに違いはあるものの、日本に滞在中の外国人や私自身を通して海外の人々の生活や考え方の違いなどは（異文化）、少しずつ理解してもらえたように思う。
・様々。ほとんど無反応の人から、驚いたり、「えらかったね」、「大変だったんだねぇ」と感心する人まで。
・「2年間もお金もらって遊んでくるなんて」と批判的な意見を言う人もいた。
・人それぞれで反応が異なる。興味を持った人は最後まできちんと聞いてくれてたくさんの質問をしてくれた。興味を持たない人は、一言二言で終わった。
・「何か病気にならなかった？」、「現地で嫁さんもらわなかった？」「どんな食生活を送った？」など必ずこういった質問が返ってきます。
・私の言葉や写真での伝え方がよろしくなかったようで反応がいまいちだった。
・なかなか正確には伝わらず、私はとても楽しかったと伝えたつもりが「大変だったね」という回答になり困った。
・帰国した当初の失業期間は近所、親戚の人たちが「話を聞きたい」とやってくるたびに写真や映像（ビデオ）等で現地の様子を伝える努力をしたが、正確に伝わったかどうか疑問がある。ニジェールという日本になじみのない国の名前だけでも家族、友人が覚えてくれただけでも一つの成果なのでは？
・私の家は明治の頃から海外で活動をしていたので父をはじめ、皆興味深く聞いてくれる。特に父は自分の体験をふまえアドバイスを隊員の任期中からくれていた。祖父、曾祖父の今まで聞いたことのない話も聞かせてもらうようになった。
・「すごいねー。」「立派だねー。」「どれぐらい暑いのかねー。」「そう言われてもイメージできないよ。」
・両親については、別世界の出来事のようで、何もない・未開な所とのイメージが強く、新たな視野を受け入れにくいようで、あまり反応はなかった。直接話をした友人達は考え方を新たにし、中には参加してみたいと考えるような人もいる。やはり大変であるとの印象が多い。一方、手紙・メールなどでのやり取りをしてる友人については、未開な所で活動していたとのイメージが強いようで、本当に理解しているか不明な点がある。
・手紙やＥメール等で時々色々なエピソードを書くがどうも想像ができないようなところがあるらしく、理解が難しいといっているところがある。
・興味を持って聞き返してくれる。特に親は新聞などで少しでも国際協力や協力隊の記事などが記載されると私以上に敏感に反応しているみたいである。日本で開催される国際交流の場にも参加するようになった。
・ごく一般的な反応。
・肯定的な反応が多かった。自分のやりたいことをやっているということで皆理解を示してくれた。
・家族は国際協力や協力隊のことについてあまり知らないのでピンとこないようだ。友人は協力隊のイメージだけで言ってくれるのであろうが自分じゃとてもできないことをやっているのですごく尊敬すると言われる。

・当初は反対（心配）していた母親は、頻繁に送られてくる私からの手紙を読んで、私の楽しんで生活している様子を知り、徐々に安心していった。以前は少しアフリカに偏見の目があったように思われるが、最近は親近感を感じているようである。友人の大部分は大学を卒業して、普通のサラリーマン・ OL として真っ当に働いている人が多いため、私が日常とかけ離れたところで生活していたことを羨ましがり、また、厳しい環境を乗り切ったことを賞賛してくれた。日本で様々なしがらみから抜けられず、興味があったとしてもなかなか実行できない友人が「勇気をもらった」言ってくれた一言がとても印象に残っている。しかし、国際協力に全く興味がない人も中にはおり、そういった人々には、どんなにアフリカの経験を伝えても関心を持てもらえず。「なんでわざわざそんな厳しい環境に...」と思われるのみである。
・とても興味を持って聞いてくれた。やはり日本人にとってアフリカと言えば東アフリカを指しており、西アフリカでの話は今まで聞いたことがなかったので興味があったようである。協力隊の活動自体も世間では知られているとは言い難いため、そのシステムも説明する必要があった。
・概ね想像ができない。あるいは想像の範囲を超えているようである。興味を持って熱心に聞いてくれ、自分の子どもも大きくなったら参加させたいという人もいる。私の場合、電気、水道のない村での生活であったため、協力活動の内容に話題が至る前に、そこでの生活ぶりを語った時点で驚きと衝撃を与えてしまうようである。
・日本とは全く違う環境や習慣に対して興味を持って聞いてくれました。

11．協力隊活動を振り返って、あなたは協力隊に参加して、どのような意味があったと考えますか。また、学んだことは何ですか。思い付くまま記述してください。

内　容：

・特に意味があったとは思っていない。自分が参加したくて行っただけと思う。
・学んだことは日本がどういった国で何が良く何が悪いかが前よりも違った方向から見れるようになったこと、外国が良くて日本が悪いなど考えずに、どの国も良くもあり悪くもあるとわかったこと。
・協力隊は自分のやりたいこと（国際緑化、砂漠化防止等）をやらせてもらえたとても良い「場」であった。また、国際協力に従事していくための良い「出発点」になったと思う。
・学んだことは自分の専門に限らず、地域住民へのアプローチ方法、仕事の進め方、人間関係等々、それはそれはたくさんである。
・協力隊参加後の自分の進路の方向性が定まったこと。
・海外に住む人々の暮らしや考え方の違いなどを２年間生活を共にして学ぶことができた。
・日本を離れていて「外国人の目」で日本の国を客観的に見る機会を得た（日本の良い面、良くない面など、日本の中では普段気づかなかったことを見つめ直し、考えるための機会や時間を得た)。
・途上国の暮らし、そこの人々と一歩に働いたり、話したり、遊んだりしたこと全てすごい貴重な体験だった。何もなくても（物質が不足していても）工夫して色々できるようになったかも。いい意味でのいいかげんさが身についた。真剣に生きなきゃいけないと感じた。やりたいことをやって生きていこうと思った。信頼関係を築くことの難しさと大切さを痛感した。日本の恵まれた環境（経済、自然など）をしみじみ思った。
・自分の能力には限界があること、仕事はできることとできないことをすばやく判断してできることを実行せねばならない、という常識をわきまえる意味で多くを学んだ。
・現地の人の思考に関して、日本とは異なると実体験として思った。そしてきっと他の外国人も日本人とは思考が違うのだろうと類推できるようになった。
・仕事を推進する上では単に違うということに止まらず、その違いにより仕事の手法を日本とは変えなければならないと思うようになった。

・日本を意識した。日本人として恥ずかしくない行動をとらないといけないと思うようになった。
・協力隊に参加して、ニジェールのほんの一部ですが知ることができた。これが私にとって大きな意味のあること。
・比較的若い年齢で参加したので、柔軟に物事を受け入れることができ、途上国の実情、援助のあり方等々を知る良い機会となった。
・考えたこと、教えたこと、学んだこと、そして少し教えたこと。人生の財産であると同時に今後の自分の原点になると思う。また、着任から帰国まで毎日日誌（約 20 冊）をつけた、また週末を利用し村の文化的背景や歴史を調べた。文字のない村でも当たり前のように 15 代前までの村の様子は語り部（グリオ）によって伝えられている。彼らの生活から学ぶものは多かった。とにかく熱く走った3年間だった。
・JICA はイヤな組織だということ。正しいと信じることをやり通すにはエラくなんなきゃ。
・国際協力活動を続けているという意思の再確認・自信、この地域で活動している日本人の方々との交流・人間関係形成ができた。技術面については、日本ではほとんど学べないことであったので貴重な経験となった。
・今まで文章で見たことはあったが直接国際協力活動に接することはなかった。協力隊活動によって国際協力の基本的なこと、現場のことがわかってよかった。また、多くの国際協力関係者と知り合えて良かった。
・一番学んだこととしてプロジェクトやこの国の体制から仕事の責任を重んじており、活動をするうえで常に責任ということを覚えておくという面を学んだ。
・文化、生活の違いを実感できる、体験できる。人の意見、考え、感じ方の違いを聞くことのできる機会が多い。生活の工夫、意思の伝え方などで自分で考えることが多くなった。人間関係、人との関わり方。まったく知らなかっ興味のなかった物事や職種の人たちとのつながり。自分についても考えるようになった。
・今まで組織の中で本格的に働いたことがなかったのでそれを経験できたことは意味があった。
・協力隊に参加することで国際協力の現場を体験することができた。国際協力への第一歩となった。
・「どのような意味があった」までは現時点ではわからない。
・人間関係について学んでいると思う。
・自分がいろいろなものを吸収できたことが一番大きいと思います。その村の流れだとか、援助を待っている村人の気持ちだとか、援助を行なう側の気持ちというものは日本にいて感じることのできなかったものだと思います。それに触れられることができたことはすごく自分の中で大きなものだと思っています。
・協力隊に参加して日本以外の国で生きていくことの難しさと楽しさを知った。これからの人生にとって日本人ではない人だけの様々な考え方を知ることができたことは自分の考え方を広げることができ役に立つだろうと思う。
・人生経験の一つとして参加したので自分なりに意味があったと思うが、そこから得たものは少なかった。将来、国際協力を続けていく人にとってはプロジェクトで活動したことも含めてとても意味あるものになるであろう。また、プロジェクト活動を通し、組織の難しさを学んだ。
・協力隊活動を通して本当に様々なことを学んだ。私は大学で林業を勉強し、サヘル地域の砂漠化防止活動に貢献することが長年の夢であったが、ただ単に植林を施せば良いというものでないことがわかった。現地で活動するには、現地の人の理解と助けが必要である（本来は彼らが主体となるべきである）が、大部分の任国では文化や習慣、宗教などが日本そそれとは異なり、時にはその相互不理解が活動に支障をきたすことがある。よって、まず人と人とのコミュニケーションが非常に重要だということに気づいた。これがないと活動は全く前に進まないであろう。しかしながら、我々は日本から派遣されている以上、任国の考え方を 100％尊重する必要はなく、日本的な考えを主張していることも一つの試みであると考えている。しかし、説明できるだけの語学力がないと相手を納得させることができず、ただの押し付けがましい日本人で終わってしまう。以上のように私が一番学んだことは、国際協力の場では、まず「現地で用いられている言語の習得」が重要であるということである。
・まずは相手の状況を理解することが何においても先であることを知った。その上で自分の立場意見を言わなければ

相互理解することは難しい。日本にいてそのようなことを考えたことはなかった。コミュニケーションを取らないことには何も始まらないのだから。

・途上国（少なくとも任国）の社会が少しでも見えたこと。それまで私にとってアフリカは未知の世界であったが、人々の生活の困難さ、考え方、生き方に触れることができ、日本やアジアの諸国と比較してみることも興味深かった。極貧といわれる国では人々は非常につつましい生活を営んでいながらも素朴でホスピタリティあふれる精神で接してくれたので本当に感激しました。学んだことも多く、とても書ききれないが、協力活動を行なう難しさもさることながら、細かいことにこだわらず一所懸命生きていくこと、人の（日本人も含めて）やさしさなど日本で普通に生活していたのではあまり感じられないことを学び取れたと思う。それにハウサ語も含めて。

・人間皆悩んだり、喜んだり、悲しんだりするのは同じだと思いました。また、人間どんなに頑張っても一人では生きられないということも考えさせられました。それによって人にやさしくなれるようになり、自分自身が成長したということ。一番学んだことは思いやりです。

12. あなたはチャンスがあればもう一度国際協力活動に参加したいですか。

ア）はい　：　14　　イ）いいえ　：　2　　ウ）現在参加している　：　5　　未選択　：　1

（派遣中隊員の選択肢は、「ア）はい」と「イ）いいえ」のみ）

理由／内容：

・無理してチャンスを探したりすることはないが目に入って自分に向いていて、今の仕事、家族等とのタイミングが合えば参加するかもしれない。

・現在は修行中の身である。将来的には 仕事のできる 専門家としてやっていきたいと思っている。

・現在全ての人が何らかの形で参加しているように思います。今後は国内で青少年とかかわりのある仕事や活動を行いながら約10年後位に再び任国へ赴きたいという希望はあります。

・自分へのチャレンジ（自己満足？）

・文化人類学を学び始めてから発展途上国の人たちのことについて聞き知り、協力隊活動を通して自分でも学んだことを活かした国際協力活動をすることができると思い始めた。今度機会があれば自分の専門性、協力活動での経験を活かしてより良い活動を行なうことができると思うので参加したい。

・専門家、シニアボランティア。

・食べ物を作る、ことに現金収入につながる集約農業で西アフリカのサヘル地域で長期の貯蔵が可能な野菜栽培には大きな、はかりしれない可能性と夢がある。一生をこの夢に仲間達と力を合わせてやっていきたい。

・金があれば。

・協力隊参加以前からの意思によるもの。

・協力隊に来る以前より、自分は「緑化」という仕事を続けていきたいと思っていた。その第一歩として協力隊の「植林」として活動してきた。今までの活動を振り返り、やはり外国での緑化という仕事を続けていきたいと思った。だから、何らかのチャンスをつかみ緑化という国際協力を続けていきたいと思っている。

・まだ自分が本当にやりたいと思うことが明確ではなく曖昧なのだが、興味があるという面でチャンスがあれば参加したい。

・他文化や他地域の状況をもっと知りたいので参加したい。

・学生時代より国際協力に対して興味を抱いていた。これから先どのような形であれ国際協力に関わった仕事をしていきたいと思っている。

・正直言うと現時点では「国際協力活動にもう一度」ということは考えていません。

・国際協力の重要性を知りたいので参加したい。

・国際協力の現場を経験できたことはとても大きかったが、それを表から裏からも見た結果、自分のライフワークではないと思ったため。
・サヘル地域の砂漠化防止活動に貢献することは、私の生涯を通しての希望であり、当初から協力隊の 2 年間だけで満足するつもりではなかった。アメリカの大学院において「乾燥地における自然管理」についてより高度な知識と言葉（英語）や積極性など国際社会で必要とされるスキルを身につけ、レベルアップして再び国際協力活動に参加したい。「カレゴロ緑の推進協力プロジェクト」は、その世界に参入する、まさに第一歩であったし、再び国際協力に戻れたとき、この経験をフルに活用できると考えている。
・アフリカが好きであるからというのが一番大きい。それ以外の理由としてはまだ知らないところがたくさんあるから。これは西アフリカを含め、アジア、アメリカ、東アフリカなど、未だ行ったことがない所で仕事をしたいため。
・これまでの失敗や経験を活かして協力活動を再考するチャンスがあればと考えている。農村における現金収入につながるようなプロジェクト。
・自分自身の成長につながる。毎日が戦いの日々で刺激的（精神的に自分との、または他人との）。生活がよく変わっていくのを見るのはうれしいことなので。

13. あなたのご家族に協力隊の参加に対するアンケートを実施してよいですか。
ア）はい　：　10　　イ）いいえ　：　2　　未選択　：　3

Ⅱ．チーム派遣に関する質問

1．個別単独派遣でなく、チーム派遣隊員として活動したことの良かった点、悪かった点を挙げてください。

内　容：

良かった点

・良かった点は行ってすぐ何をやるか、何が問題となっているかが出てきているので2年間をフルに使える。
・すぐに活動ができる点が良い。
・新しく行っても現地の人の受け入れる姿勢ができている。
・自分の個人生活に不安が少ない。
・一人よりも大きな仕事ができる
・赴任したときには3年目の隊員が引継ぎのことを考慮して1年間の任期延長をしたので仕事についてある程度教えてもらうことができた。そのため赴任後比較的すんなりと活動を開始することができ、その点は良かったと思っている。個別派遣の場合は仕事を軌道に乗せるためにはもっと多くの時間を有すると思う。
・他隊員と活動を協力し合って互いに刺激を受けながら行なえる点。
・交代隊員の引継ぎがスムーズに行なえる点。
・大きな企画を実施できる（人手や予算があるから）。
・住民に対していろいろな面の（複合的な）支援ができる。
・個別単独派遣では経験できない活動ができた点。専門家の教えを受けながら活動の骨格を検討し、それぞれ専門性を持つチームの仲間と協議しながら一つの目的に向け活動を実施するというプロセスが経験できたことは自分の仕事の仕方のみならず、生活をする上でも大きく役立った。自分の専門以外の知識や経験をつめたことも今の自分の研究を豊かにしている気がする。
・相談相手が近くにいた（例えば赴任当初、わからないことがあれば人にたずねたらよかった）。日本語で話せる人が近くにいた（外国語だけだとストレスが大きすぎる）。仕事の引継ぎ、病気のとき、得手・不得手の仕事の相互補完。
・活動を協力していただけたことと一人ではないという安心。
・職種の違うメンバーがおのおのの専門分野から意見を出し合い、一つのプロジェクト目標に向かって活動できた点。相乗効果が発揮できる点。
・チーム派遣は難しい部分もあるかもしれないが、我々が最も力を発揮できるものだと思う。セネガルの内部分裂はよく聞くが現地の人と力を合わせてやっていくのに日本人同士の対立は悲しいことだと思う。意見の違いはじっくり話し合うべきだが、チームワークは現地の人に見てもらいたい日本人の誇れるものだと思う。
・活動・業務はやりやすかった。
・車輌などの資機材使用が容易であり、予算面でも特に制約を受けることがなかった。
・特異的なことではあるがカウンターパートが充分に働ける環境であったこと。
・単独派遣より、より深い専門的なことを行なえた。また、プロジェクトだからできる国際協力の知識を多く学べたし、活動もたくさんあった。
・他の職種の活動を近くで見れ広い視野を持てるきっかけとなる。
・仲間が近くにいるので相談しやすい（活動している内容も理解してくれているので）。
・目的があるのではりあいがあり迷いにくい。
・形、結果が残りやすい。
・チームの仲間ができたこと。他職種の業務内容等知ることができたこと。活動の幅が広がったと思う。

・仕事を始める際に個人隊員の人が悩むであろう悩みは一切なかったということです。活動が一貫しているため。村人にも隊員にも入っていきやすいということだと思います。
・他分野の活動を身近に見れ、体験でき勉強になった。
・一人ではできない大きなことをやることができた。
・他の職種の隊員と協力して活動した結果、大きな成果をあげることができた。また、困ったときには他の隊員の助けを得れる。
・過去の隊員が行なってきた活動やその失敗点及び成果を現存の隊員から直に話が聞けること。
・常に周りの隊員がサポートしてくれるため、生活・活動になれるのに時間がかからない。
・生活環境が特に厳しいところであったため仲間がいて困難をともにできることは精神的な支えであった。
・農業系の隊員だけでなく、村落の隊員がいたことが良かった。社会経験、専門での経験が違う人たちがいることにより、多面的な切り口でプロジェクトの活動を進めることができ、またその一員としてメンバーと意見をつき合せることができたのは貴重な経験だった。資機材の面で恵まれていた点も１隊員としての行動範囲、活動範囲を広く持てることとなり、それが活動にも生かされていたと思う。
・大きな単位で仕事ができるのは利点であると思う。人数が多い分、不足している部門へカバーし易い。また、プロジェクトとしての方向性が決まっているので計画も立てやすいし、結果が見え易いと思った。
・隊員同士から学んだり相談し合ったりできる。
・技術・経験の蓄積があり学ぶところが大きい。
・現場の活動も前任者のフォローアップにより効果的。
・現地の人々との意識の違いからくるストレスが単独の場合と比べて少ない。

悪かった点
・悪い点は日本語を使う機会があるので現地の言葉を覚えにくい。
・仕事内容に他の日本人の意見を聞くことになり動きにくい人もいた。
・１年目の隊員が３年目の隊員と同じ仕事をこなすことは非常にキツく（最初は任地の環境に適応するだけで精一杯)、少しばかりオーバーワークであった。
・日本人同士が集まりすぎると語学力が上達しない。
・現地の人たちとの付き合いが希薄になりがちな点。
・ついつい日本人だけで活動を進めがちになった。
・日本語を使ってばかりで、仏語、ザルマ語が上達しなかった。
・チームは小さな 日本人社会 だった（決まりごととか人間関係とか難しいこともあった)。
・村落開発普及員という職種であることも影響してか、チーム内の様々な雑務が集中することがあった。本来ならばチーム全体で取り組むべき問題がまとめて降りかかることが時々自分自信の活動を遂行する上で妨げとなることがあった。また、一つの意思決定をするのに時間がかかりすぎる点も挙げられる。即座に対応すべき問題も一度チームの合意が必要である場合は、実行に移すまでに少なくとも１週間待つ必要があった。
・大切なことであっても新しい仕事を起こしにくい。
・会議がたいへん。
・時にわずらわしい。
・どうしても年次の早い隊員の意見・考え方が優先されがちになる点。年次による理解力の格差。
・業務は自由でないデメリットがあった。
・隊員同士の人間関係が面倒だったりした。

・自分を抑えなければならなかったこと。つまり当時ある意味では自分がチームをまとめなければならなかったため、自分の我をはることはできない。
・活動が定まっているため単独派遣のように一人で考えいろいろ工夫するということに乏しかった。フロンティア活動といった面は弱かった。
・最初の頃これをやらなければならないという使命感みたいなものに押しつぶされそうになった。
・活動範囲の限定。ボランティアという感じではない。
・相手国のための活動ではなく、他の雑務により本来の業務がとどこおることが多い。上から突然キーワードのようなものがやってきて、それにしたがって活動してくれと言われてるように感じた。
・チームということで他の隊員の頼めることができるところ。
・現地社会に完全に溶け込めていない点。
・一貫しすぎてしまうとその時々の状況が隊員の目にうつりづらくなるということ。
・日本人同士でかたまってしまい語学が上達しなかった。ニジェール人との交流が少なかった。
・活動範囲がある程度限られているので自由がきかない。
・チームにはそれなりの定まったアプローチ手法や活動目標があるため自分なりの手法や信念を活用したいと考えた場合、それがある程度制限されてしまう点。
・どうしても日本語が最重要になってしまうこと。これは個人の心掛け次第かもしれないが 10 人近く隊員がいれば日本人同士のコミュニケーションが大切になる。
・プロジェクトとしての活動を行なうがために個人としての興味を持って動くことあまりできなかったこと。
・個人のアイデアが必ずしもチームに反映されないこと。チームとしての方向性が優先されるため、自分での活動計画が活かしにくいこと。派遣されてくる隊員の性質によって仕事をしにくい場合もある（やりやすい場合がある）。

2．協力隊をチームで派遣することの得失は何だと思いますか。

内　容：

・個人よりは相手の人に対して影響は大きく、広い範囲で活動ができるので効果は広いが深さは結局個人一人頭とかわらないと思う。その他、どうしても報告書というのが日本事務所で評価される時に数字やデータの点で見られてしまうので字に表せないところを評価されず、日本事務所から見れば効果が少ないと思われるところが残念。
・チーム派遣の良いところはなんといっても活動理念やテーマを隊員が引き継いでいけるところにあると思います。自分もこのことを肌で感じることができました。1998 年 10 月に行なわれた最終評価調査時に、当時の調査団長がパイオニア型、創業型、仕上げ型の隊員というかたちが合って良いということを言っていましたが、カレゴロの歴代植林隊員の活動を振り返って見るとまさしくこの形が存在するのです。具体的にはプロジェクトサイト内の社会経済状況を把握するために村落調査から開始した初代隊員、啓蒙活動の時間帯を夜間から植林分野と活動を共にする土地所有者である成人男子の集まりやすい夕方に変えた２代目の隊員、そしてプロジェクト終了後も村人自身で植林活動が継続できるように直播き造林技術の普及活動に努めた３代目の隊員である。このように隊次毎の隊員がそれぞれの役割を演じたため、大変効率的に活動が行なわれました。通常の個別派遣では、引継ぎもそこそこであったり（もしくはまったく行なわれないとか）、隊員が入れ替わる毎に方針も変わってしまい、気がついたら前任者と同じ過ちを犯していたとかいうこともあるかもしれません。

チーム派遣の欠点としては、既存の活動を引き継ぐことが多いわけですから、活動がマンネリ化してしまったり、あまりシステム化された活動内容で活動が面白みがなくなってしまうところにあるでしょう。自分自身も派遣前から評価が高いプロジェクトであり、赴任したときもうまく機能しているように感じられたので、自分が本当に思い描いていたものは実施されることなく任期を終了してしまいました。帰国後、経験豊富な諸先輩方の話を聞いたり、

住民参加型開発に関して勉強してみて、あの時に自分が感じていたことは間違っていなかったと今になって確信していますが、隊員時は目の前の仕事をこなすだけで精一杯でしたし、得られる情報量も限られていますので、なかなか思いきった行動に踏み切れませんでした。

・大きな目標を掲げたチーム派遣だと比較的取り組みやすいように思われるが、隊員の個々の小さな活動やその成果とそれを比較するのは難しい。

・複数の職種の隊員が一つのチームとなって活動するといろいろな面から住民への支援ができる。ある企画を立ち上げようとするときにいろいろな人の意見を聞くことができる。反面、わずらわしい業務が増える（報告書を作成したり、ミッションの対応をしたり）。

・得失両面で影響してくる点としてチーム派遣形態の集団的側面が指摘される。集団的であることでしかなしえない大きな成果もあれば、集団的であるがゆえに問題を抱えてしまう点もある。

	得	失
協力隊員	予算優遇・大きな活動成果	煩雑な意思決定過程・多忙
JICA/JOCV	援助及び宣伝効果拡大	困難な組織管理・コスト過多
相手国政府	援助予算・人員の優先的確保	意思決定過程参入の困難性
現地関係者・村人	地域活性化への期待	意思決定過程参入の困難性

・活動に協力してもらえること。

・人的相乗効果。予算確保による計画的な人材・資機材の投入。

・チームワーク、計画を立てコツコツと目標に向かって頑張ることが我々の見せたい最も重要なところだと思う。個人主義の強いニジェールにあっては、「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という姿勢が、私は最も村人達が感じてほしいところであった。カレゴロでは仲間と前任者の陰口はタブーであった。

・草の根という低い視線からじっくりできること、住民参加の開発ができる。一方で、えらい人のいいなり、現場を知らない連中に命令されるのは不愉快。けっこう理不尽。長期のスパンでやれないなら効果薄。

・一人の能力では解決できない大きな・長期的な問題に対する対応が可能になり、総合的な村落開発ができる。分野の隊員が切れても派遣の間が切れないので活動が継続できる。また、複数の隊員がいることによる安心感（病気、治安面など）がある。反面、自分が計画したやりたいことが全てできるとは限らない。

・プロジェクトの方向性とのハーモニーが必要で、個性の強い隊員にとってはやりにくい。

・得たことは何かの活動を一人で考えるのではなく相談できたこと。大きなことをできたこと。失ったことは自由。定まったレールの上を活動し大きく変えられなかった。

・個人派遣では無理なような大きな活動ができる。同じ目標に向かって活動しあう人たちが近くにいることで高め合うことができる。

・得：連帯感、大きなことができること、長期の展望。失：地域の交流が少なくなる。日本側主体で全てが決まってしまう。

・多くの人材が切磋琢磨することで成果につながりやすい。日本人のペースで仕事が進む。一方、個別単独派遣と比べて活動の自由度が低い。

・仕事を始める際に個人隊員の人が悩むであろう悩みは一切なかったということです。活動が一貫しているため。村人にも隊員にも入っていきやすいということだと思います。反面、一貫しすぎてしまうとその時々の状況が隊員の目にうつりづらくなるということ。

・チームで派遣された隊員は自分の協力隊に対するイメージとは異なっている場合が多いと思う。自分はそうだった。時々チームとしての自分と協力隊員としての自分の間で葛藤があった。

・大きな成果をあげることができる。また、隊員各個人のモチベーションが向上し、ひいては人材育成にもつながる。反面、活動上、型にとらわれすぎて自由な発想がきかない。

・農業に関する支援を求められるとき、一つの専門分野でまかなえるケースは非常に少なく、例えば植林隊員であっても、果樹・病害虫の知識、農業隊員であっても、社会経済調査スキルが必要であったりする。プロジェクトでは、植林、果樹、野菜、村落開発という4種の職種がそろっていたので総合的なアプローチを展開することが可能である（アプローチがなされたかどうかに関しては十分であったとは言いがたい）。それがなされた場合、成果は2倍3倍期待できる。難しい点としてはチームは常に 10 人以上の様々な考え、経験、年齢、性質を持ったもので構成されていたためひとまとまりになって一つの解決方法を見つけ出すことが非常に困難であり、必要以上に時間がかかった。
・当然だが個人の行動がある程度制限される可能性があること。しかし、裏を返せば個人ではできないこともプロジェクトにいることによって可能になる。
・安全、一般生活などを管理するサイドから見れば安心できるはずである（個々に赴任させるよりも）。プロジェクト、活動を評価しやすい(結果が見え易い)面もある。ただ、個別に派遣されるよりも、配属先省庁や同僚などと直接にコンタクトを取る機会が減り、日本人間の業務調整が主体となりやすい。カウンターパートにも信頼できる人物が当たればよいが、人物次第で大きく左右される面もある。
・日本人主導となりやすい。1 人より 2 人、知恵を出し合い問題を解決できる。2年間でできない活動をフォローアップできる。予算が多い。ただし、チームワークが悪いとうまくかない。

3．同様のプロジェクトを実施する場合、今後の協力の派遣形態について下記のうち妥当と考えるものを1つ選び、その理由を記載してください。

A　専門家と各種の隊員が組んだこのようなプロジェクト派遣がよい　：　14

理　由：

・プロジェクトとしていれる場合で考えると A が良い。理由は専門家が相手国の役人とのコンタクトを取り、専門家と隊員が連絡を取り、隊員が現場で作業するからである。B だと現地上層部に我々の活動をアピールするチャンスが少ないのであまり良くない。プロジェクトとしてでなければ C も OK である。
・パイオニア型、創業型、仕上げ型といったレベルぐらいまでは隊員でも可能でしょう。しかし、プロジェクトにも大きな変換期というものは有り（例えばフェーズ1からフェーズ2への移行時とか）、そのような時の活動計画を立てるということは隊員レベルでは無理です。実際、カレゴロの隊員は 98 年の最終評価時に出来ませんでした。そういったときに専門家の存在が重要なわけです。それから住民と共にプロジェクトの全体像を熟知した専門家の存在は必要でしょう。カレゴロのようなプロジェクトの場合、社会開発の知識に長けた専門家が好ましいであろうと思います。いずれにしろブレーン的存在の人物は必要です。
・専門家（チームリーダー）は絶対必要だと思う（チーム全体をみてチームをまとめる。対派遣国政府、対各ミッションに際して特に）。
・プロジェクトの内容、目的に応じていくつかの職種の隊員がいたほうが面白いことができると思う。
・プロジェクト派遣形態をとる場合、東京事務局・派遣国事務局との交渉、相手国政府機関との折衝などが必要となり、協力隊レベルでできる活動の範囲を大きく越えてしまう。チーム内の意見調整を効果的に実施するためにも専門家レベルの人材がチーム専属のコーディネーターとして不可欠であると思われる。隊員のグループ派遣や同地域への個別派遣隊員の集中形態で、チーム派遣と同等以上の効果をあげられるとは思えない。
・専門家が政府との交渉ごとをやってくれた。その分隊員は仕事に専念できたから。
・隊員だけではまとまらないことや解決できないことがあるので専門家は大事な存在だったと考えます。
・専門家は先方政府との交渉、現地及び日本国内向けの広報と、隊員レベルでは解決が困難な業務を担当し、隊員は各自が持っている専門分野での能力を現場で十分発揮できるような環境を作ることが肝要なため。

・私は三名の専門家と知り合えたが、初代の専門家は隊員からの信頼も大きく、心のこもった活動と隊員のバックアップを多方面に渡って行なってくださったので勉強にもなったし、恩師のような存在である。村人がご馳走を用意してくれたのに約束の時間を三時間過ぎても現れず二日酔いで寝ていたり、依頼された調査を隊員にやらせ自分の名前で報告したり、一週間くらいでプロジェクトの村人のことをほとんどわかったなど、専門家もいろいろである。それでもやはり隊員だけでは足りないと感じる。やはり専門家はプロジェクトの中ではいなくてはならないと思う。
・有能な専門家は必要でしょう。シニア隊員と組むのも面白いでしょう。
・隊員内にもシニアまたはチームをまとめる役目のできる隊員が必要。専門家の活動形態にもよるが定期的に通ってくる専門家では現地での隊員活動を把握しきれない。また、活動に際してはある程度の経費が必要、車輌関係経費、カウンターパートに対する謝礼（給料ではない）、グループまたは個人の場合、経費に対しタイムリーな措置が取れず活動を制約してしまう。特にアフリカにおいてはアジアと異なり給料が払われず公務員などは食するにも苦労しているので、カウンターパートに対して何らかの生活に最低限の支援ができる措置がとれるようにすることが重要である。
・チームのまとめ役、現地政府とのパイプ役、技術的アドバイス等専門家に負うところが大きい。成果が求められるプロジェクトの場合、経験豊富な専門家の存在は必要不可欠であると思う。
・プロジェクトを運べる人間が必ず必要だと思う。隊員だけだと 2 年ごとには入れ替わるため、隊次の古い順からプロジェクトを動かさなければならないという状態におちいりやすい。そのような状態では新しい風もおこしにくい。
・プロジェクト形態ということは複数名の隊員が配置されるということで、そういった意味では一つの組織といえる。組織には必ずリーダーが必要で、その場合、その任務をおうのは専門家及びシニア隊員クラスの人材が妥当と考える。学卒中心のお互い同じ身分の隊員同士ではなかなか組織というものが成り立ちにくいのは事実である。
・現場である程度インパクトのある活動をするなら、それ相応の予算と存在感のある A タイプがよいと思う。目的も同じくした各種隊員及びカウンターパートが結束することによって実のある活動ができると思う。また、まとまった活動を少なくとも6年くらいは継続するのが効果的だと思う。

B　隊員だけのグループ派遣がよい　　：　2

理　由：

・協力隊ということとして、チーム派遣は制約が少し多いように思える。しかし、単独より共同で行なうことのメリットは大きい。そこで、チーム派遣より少し制約を小さくした形がよい。隊員は個別に活動もできるし、共同としての活動もできる。また、相談し合うといった形がいい。
・プロジェクトの大きさ、期間、最終目的によると思う。A にしない理由は専門家がどの程度必要であるか、プロジェクトに貢献できるのかがよくわからない。カレゴロの場合、前半は省庁と隊員とのパイプ役として緊密に連絡をとっていたが、後半は何だかよくわからない面もあった(私が知らないだけかもしれないが)。5～6名である程度目的を定めて実施するのであれば B でもよいと思う。この場合は隊員の職種を関連づけて選ぶ必要がある。私は個人的にカレゴロ(チーム)マタンカリ(グループ) と両方経験しているが、マタンカリのグループは職種が野菜、手工芸、農業土木、測量、村落など関連性が薄く、連携を見出すのに苦労していた。保健婦も識字もというのではなく、関連職種で的を決めなくては派遣されてくる隊員もやりづらいだろう。5名以下で行なうのであれば個別派遣も面白いと考えるが、それぞれの隊員の最終目標がほとんど同じであるのなら、B の派遣スタイルのほうが効率的のような気がする、週に一回程度集まり方向性の確認、現況報告をし合えばいいのではないかと考える。

C　関係する専門の隊員の個別派遣がよい　　：　0

D　どれとも言えない　　：　6

理　由：

・派遣国や内容などある国でのプロジェクトの成功例が他の国でも通用し、当てはまるかどうかは判断が難しい（ただ、ニジェールの場合は「A」の例が適切だったと思う）。派遣形態という「わく組み」を作ることよりも、現場で必要とされる形に応じて、また、時間の経過と共にプロジェクトの意義が変化するようであれば当初予定していた活動期間の延長や短縮、内容の変更などが出てきてもおかしくはないから。また、「B」の例は隊員の中で隊員をまとめるリーダー的存在が必要で難しいように思う。

・プロジェクトが入る地域や目的によって各種の隊員が組むか、関係する専門の隊員の個別派遣かは変わってくると思うが、専門家はいれるべきだと思う。その場合の専門家の位置づけをもっと明確にしなければならないと思う。

・共に活動する相手国の組織の状況等によって違うと思うので何とも言えない。

・協力隊員ではなく専門家と隊員レベルのプロジェクト用の人を派遣するのがよいと思う。協力隊という枠の中でやるのは隊員でつらい思いをする人が出てくると思う。プロジェクト隊員は普通の協力隊員ではないから。

・プロジェクトが進行するにつれ活動範囲が広がり、当初は4～5人であったチームが現在では常に 10 人前後と大所帯になっている。チームは異なる年齢、経験、考えを持ったものによって構成されており、人数が増えれば増えるほどかえってひとまとまりになって、何かを成し遂げることが難しく感じた。また、例えば同期・同職種で派遣されたものはライバル意識を持って牽制しあっているような部分が見られることもあり、それがはたしていい影響となるのか悪い影響となるのかわからない。私自身も、他の職種の隊員と連携しての活動形態のため自分のペースを保つことができず、時に圧迫感を感じることがあった。

チームは一人で活動を行なうより大きな成果を出せるのは事実であるが「カレゴロ緑の推進プロジェクト」における成果はチームだったからできたこと、というよりも運搬手段（ピックアップ）や機材（ジェネレーターやコンピュータ）、人件費などのプロジェクトの資金を利用できたことの方が理由として大きい気がする。年間5万本の植林は、他の職種の隊員の力がなくても、植林隊員だけで農民を雇い実施することが可能であったと思うし、それならチームとして動いた意味がない。個人でなくチームとしての成果を見た場合、職種間の連携した活動が始まっていたので現在について何ともいえないがやっとチームらしい総合的な活動を開始できたところでプロジェクトが終了してしまうのもこれまた意味がないと感じた。しかし、このプロジェクトの経験を再び新たなチーム派遣プロジェクトで活用できるならチームだからこそできること、それによる成果が期待できるであろう。

・そのプロジェクトの計画内容による。隊員だけでは関係機関に対するアプローチ（特に中央政府）は難しい、それを現地事務所がフォローできれば問題ない。カレゴロプロジェクトはそこをうまくできていなかったと思う。カレゴロのように専門家を中心に行うことを否定しないが、リーダーの経験を持った人物を専門家として配置する必要があると思う。専門家に身分を絞る必要もなく、シニアでも良いと思う。隊員だけでのグループではリーダーシップを取れ、プロジェクト内の隊員がそれを認めることができれば良いが、現実問題として難しいと思う。プロジェクトを行なうに当たり個別派遣を行なうというのは、意思統一が難しいのではないだろうか。

4．事務局が将来チーム派遣を行う場合、提案がありましたら挙げてください。

内　容：

・着任して2～3ヶ月で自分帰るときの後任のことを考えるのは難しい（2年後自分の職種が必要か、自分が延長するか等を決めかねる）ので、引継ぎを十分考慮してほしい。

・プロジェクトの評価をするのに現地からの報告がある前に日本事務所がつかんでいる情報だけで評価案を決定するのはやめた方が良い。

・派遣の方法としてはカレゴロプロジェクトのようで良いと思うが、将来プロジェクトができて、途中で方針が曲が

っても期間短縮などは計画通りやってほしい。

- ある協力隊OBであり、元某国の専門家はネパール以外の緑のプロジェクトはワンパターンであると言っています。もし、農村開発を中心とするプロジェクトにするなら、はじめに村落開発の隊員を数名派遣し、彼らの活動を通して地域住民のニーズが読み取れたら派遣される職種を決定するとうことは可能でしょうか？カレゴロにしてもプロジェクト開始前の活動計画（砂丘固定重視）が村落調査後に大幅に見直されています。これぐらいの柔軟性はあっても良いと思います。
- 実際に現地で活動を行なう協力隊員や専門家の生の声をもとにしながら形式にとらわれずに様々な形態（任地の違い、内容の違い、隊員の派遣数、専門分野の違いなど）、その他いろいろなことに対して、対応できるよう努力してほしい。
- チーム派遣隊員・専門家のリクルートシステムの確立。双方ともチーム派遣の得失を良く理解した人材を選抜していただきたいです。特に専門家の方はチーム派遣に関心のある方か理解のある方（チーム派遣経験者が最適）であることが望ましい。
- 専門家とかの給料が高すぎると思います。その予算を減らしこっちへお金を回してください。どれだけ彼（女）らがお金をもらっているかもちろん知っているでしょ。どうしてあんなに常識はずれなのですか？（もちろんこのことは私達のチームの専門家に言っているのではありません）。税金の無駄です。
- 事前調査は慎重に時間をかけて行なう。先方政府の理解度、予算等を勘定してから案件を選択する。各隊員のTORを明確にし、派遣時期等計画的に実施する。
- 専門家の派遣をもっと慎重に行なってもらいたい。特に仏語に関しては隊員に通訳させる専門家もいるが、現地人やスタッフから日本にいてもいろいろ話が入ってくる。ニジェール人は語学のセンスは日本人以上なので10年以上西アフリカにいて話せないのは頭が悪いと思われても仕方がない。物質的に貧しく、特に子ども達は死ととなりあわせである。この一点をお願いしたい。
- もっともっと長期でやること。現場の意思を尊重すること、理解すること。サイトが広すぎ。カレゴロの場合従業員や協力者への金の面でもっと隊員が困らないようにすべき。
- プロジェクトの終了後、活動を政府に引き渡しても公務員に対する予算的な問題があり、活動が機能しないので、任国の公共機関または公務員と活動するより、直接住民グループと活動できる形態のほうが持続的な活動としては成功する。
- ローカルコスト（カウンターパートに対する手当ての一部）を負担できる形態、ある意味ではよいカウンターパートを見つけることが必要。
- チーム内規のようなものを作成する必要がある。
- 採用時に確認し、意向をはっきりさせる。
- 専門家の資質（充分に隊員をフォローでき、強制しない、参加手法の重視）。
- 協力隊に来る人はいろいろなパターンがあると思う。ボランティアで自分でいろいろやりたい人、仕事をするようにバリバリに活動したい人。チーム派遣はどちらかというと後者の人が合うと思う。派遣時の人選で上記の要因を考えてほしい。(協力隊としてプロジェクト活動に疑問を持つ人もいた)
- 調査期間を長く設けて国同士の意見交換に加え、住民が何を欲しているかを調査した上でチーム派遣を行なう。
- まず、チーム派遣の概要をきっちりとまとめてから隊員の派遣を行なってほしい（曖昧な部分が多いと思われるので）。
- チーム派遣事前研修（講座）の実施：チーム派遣される隊員についてはあらかじめチーム派遣とはどういうものなのかという話が必要。
- チーム派遣担当職員の配置。

・国内支援委員会の位置づけを明確にしてほしい。
・各チーム派遣プロジェクトであった成果と失敗点をまとめあげ（もしくはこういったアンケートの結果を利用し）、事前講習などをし、活動当初の無駄な時間を排除し、スムーズに活動が開始できるようにしてほしい。一人の隊員がそこに腰を据えて活動できるように、長めの任期を認めてほしいし、同じにプロジェクト実施期間も最低 10 年くらいとってほしい。ただし、プロジェクトは常に小・中規模で実施すべきである。
・チーム派遣に対して経験のあるリーダーを見つける。そして隊員には職種のバランスはもちろんのこと、ある程度コーディネーター的な仕事をできる隊員（職種）を配置することが望ましい。その中で、隊員も年齢、性別にばらつきを持たせるほうが良いと思う。そのような人材を集めたうえで、現地事務所、隊員、東京事務局が一体となり各々の立場から十分な意見交換を行ない、活動を進めていける体制を整える。
・私自身チームという派遣形態にはあまり賛成できないが、多人数が必要なプロジェクトを実施する場合、やむを得ない面もある。その場合、まず任国政府省庁をもう少し巻き込んだ形でプロジェクトを進めるべきだと思う。省庁側を巻き込めばそれだけトラブルや問題も増えるだろうが、日本サイドだけ納得しているのも考えものである。また、専門家を派遣する場合もその役割、任務を明確にさせるべきだと思う。
・チームワークがうまくいくよう、少なくともチームプレーに同意する人、協調性のある人を選ぶよう心掛けてほしいです。

Ⅲ．プロジェクトに関する質問

1．プロジェクト活動は成果があったと思いますか。下記のうち該当するものを一つ選び、その理由を記載してください。

A　成果があった　　：　8

理　由：

・木がたくさん植えられ、改良かまどもたくさん作られ、タマネギ栽培も広まりつつあり、果樹苗木生産者も育った。これだけでもすごい成果ではないか。

・初代隊員と話をすると僕の時代はずいぶん変わったと感じる。

・自分の活動はお粗末でしたが、他の隊員の活動は地域の人と一緒になって目標に向かって進んでいたと思うから。

・成果があった。特に野菜分野と村落開発分野のタマネギとかまどの活動は生活を変えたと思う。植林分野についても家畜道、生垣は成果をあげたが、後半は活動の継続で精一杯だった。もう少しみんなで新しい方針が打ち出せたかもしれない。

・単独派遣と比べるとプロジェクト活動は大きな成果があったと思う。投資量が大きいとということもあるが何より8年間、同じ目的で活動を継続できたことに成果があるように思う。単独派遣の隊員と比べ、後任への引継ぎも十分行なっており8年間継続した活動が行なえた。

・植林、果樹、野菜、村落開発、どの分野の活動においても共に活動した村人の意識は確実に変化していると思う。

・現場を見ればプロジェクトサイトが変わったことはわかる。

・地域住民に関しては成果があったと思う。目に見える形では、植林の生垣、改良かまど、接木果樹、ガルミオニオン等である。村の人たちにとって日本人はほぼ始めてであったと思う。日本から来た海の物とも山の物ともつかない若者といろいろ活動をした村人の異文化体験も成果ではないだろうか。

B　一応の成果があった　　：　13

理　由：

・プロジェクトの計画の 6 年のうち私は中 2 年のみなので成果がどうあったか判断はつきませんが、樹の植え方、接木の方法等テクニック面だけでも効果があったと思います。

・目に見える形で植林の成果が出ており、地域住民も植林活動の利点や意義が多少なりともわかり始めていた。よって、我々のとってきたアプローチ方法が比較的短期間で、植林活動の成果を生み出し、住民に受け入れられる植林形態というものを示すことができたと思っています。しかし、プロジェクト内部の活動の分析が十分に成されていないため（隊員レベルでは難しい)、次の段階になかなか進めないでいました（活動のマンネリ化)。「一体、カレゴロのとってきた住民アプローチ手法のどこが良くて、どこが悪かったのであろうか？」といった分析が必要であります。植林分野の欠点はプロジェクトの終了後のことを念頭に入れた活動に十分な時間をかけられなかったことにあります。私は前任者から仕事を引き継ぐときに言われたのは「植林分野は何にも残そうとしなくても良い、プロジェクトが継続している間に植えて植えて植えまくれ」という言葉でした。前任者自信、初代の専門家からこのようなこと言われていたようです。「植林活動を通して地域住民の生活を向上させる」という開発目標が植林分野にありました。プロジェクトが継続している内はこのことは可能でしょうが、カレゴロの場合プロジェクト終了と同時にこの活動が終了してしまう可能性が高いです。なぜなら植林活動に用いる苗木はプロジェクトが無料配布しており、プロジェクトの終了と同時にこの無料配布は終わってしまう可能性が高いからです。98 年 10 月に行なわれた最終評価調査団からはカレゴロは 地域住民との共同作業を重視した住民参加型 のプロジェクトであると評価されていますが、カレゴロは本当に住民参加型だったのでしょうか？自分は 真の意味 での住民参加型のプロジェクトではなかったと思っています。そのようなアプローチ手法をとっていなかったし、もし真の意味での住民参加

型手法をとっていたら、さほどプロジェクト終了後のことなど気にすることもなかったと思います。この辺りのところにカレゴロが次の段階に進むための答えが隠されているのでしょう。

- プロジェクトの活動が開始されてから、今まで比較的容易に援助を受けることができたり、また、それに慣れてきていた住民がわずかながらも、これまでとは異なった我々のようなプロジェクトと接しながら、彼らの中には与えられるだけの援助よりも自主的に自らのためそして地域のために活動を行なう人たちが現れ始めたこと、また、何人かのリーダー的な役割を果たせるような村人ともめぐりあい彼らを中心に新しい動きが起こり始めたこと。
- プロジェクト活動はまだ終了しておらず、自分の参加時期も一部に過ぎないので断言は避けたいが、プロジェクトがもたらした結果の随所に一応の援助効果があったことを窺い知ることができる。年間 4 万から 5 万本の植林苗配布に始まり、果樹苗木生産販売者の育成、ガルミオニオンを中心とする野菜栽培技術の促進、野菜栽培活動の進展、改良かまど婦人グループの育成、小学校との連携プレー、自主的な環境及び生活改善へ向けた意識改革などが図られたことなどが挙げられる。また、プロジェクト隊員の中からすでに開発援助事業関係者（政府開発援助関係機関従事者、国連ボランティア隊員、NGO スタッフ、大学機関従事者等）が多く育っており、援助する側にも人材育成の面で大きな効果をあげていることも指摘される。これはプロジェクト活動の大きな成果と見るべきである。
- 植えた分だけ一応植生は増えたのでは。(減った分のほうが多いかもしれないけどそれは別問題だから)
- 初代の隊員で当時、成果がどうだったか言える状況ではない。また、帰国後、事務局から一度も報告書などは送られてきていない。プロジェクトの活動内容が帰国後どのようなかたちで行なわれているかは、公平に評価できる形での情報を持っていない。隊員間の交流による情報からの判断では、一応の成果はあったのではと思う（手前味噌であるが)。緑の推進協力プロジェクトと言う事でスタートしたわけであるが、当時からの目標として地域住民の生活向上に資する協力活動を行ない。しいては環境問題の改善につながることであった。果樹栽培技術の普及、ガルミオニオン栽培の普及などは収入の向上につながっていると思う。また、植林活動についてもアグロフォレストリーにより、はっきりした収入として目に見えないが良い影響が現れていると考えられる。しかし、今後の発展性、持続性について考えた場合、成果があったと言えるか疑問である。また、プロジェクトの活動が個人レベルを脱しきれず、グループまたは村レベルの共同体を形成できていない。このようなアンケートを想定しているのであれば、活動内容の経緯がわからなければ意見を述べられない。関係者への報告書の配布など、事務局、または担当に問題があるのではないか。
- プロジェクトが入る以前のサイトの様子を実際に見たことはないけれど、コーディネーターや村人の話を聞くと明らかに違うといっている。砂丘の方ではないが、村近郊や村の中での緑の量は明らかに多くなってきているのではないかと思う。無料配布とはいえ、今でもよく村人に苗木が欲しいと言われるのは、砂漠化防止の意識がある、ないにせよ緑を植えたいという村人の意識があるからだと思う。生垣に関しては金にもなるという「一石二鳥」の点を村人も理解しはじめてきているし、とてもよい活動の仕方だったと思う。
- 生垣、タマネギ栽培など、それが良いということがわかり、それを真似る人が出てきた。また、啓蒙活動などによる地域住民の意識の向上。
- 短い期間での活動という意味ではすごく成果があったと思う。しかし、村人、我々の考える最終目的地にはまだ遠いというのが私の感想です。サイトが広すぎたということで、成果のでた村が分野ごと、村ごとで少し離れているため、インパクトが足りないと感じることもあります。
- 目に見えて成果が現れている現場もあり、また、村人の意識もプロジェクト開始以前から比べると飛躍的に向上したと思われる。しかし、一応の成果があったとしたのは、残念ながら今でも技術援助が理解してもらえず、物質的要求をしてくる村人がいるためである。また、プロジェクト終了後も移転した技術を後世へ継続していってくれるかどうかも不安要因の一つである。
- 我々の活動についてきてくれた農民度一部は、植林による農地の保護、野菜栽培による収穫と収入等の利益を得て

いる。しかし、村によって成果の度合いは異なる。プロジェクトで扱っていた 22 か村だけでも、その社会・経済状態や意識面による違いが村によって差があり、同じ地域だからといって一様に同じ手段を講じることは不可能であった。ただし、それが知れたことも一応の成果であると考えられる。

・カレゴロプロジェクトには約7ヵ月しか参加しておらず、しかも前半であったため、最終的にはどの程度の成果があったかわからないというのが実情である。ただ、私の参加している時期には地域住民のプロジェクトに対する認識、関心が高まりつつあり、参加型のスタイルとしても軌道にのりだしていた。

・年数と予算という投資に見合う成果があったかはわかりませんが、地域住民を感化し、利用可能な植林ができたことは一応の成果だと思います。

C　あまり成果がなかった　：　0

D　成果がなかった　：　0

E　未選択　：　1

理　由：

・初代隊員であったため成果があったかどうか把握する時間がなかった。しかしながら、個人主義が発達したニジェールの村落部で「やる気のある人を対象」としたアプローチは正しい選択であったと思う。

2．プロジェクト活動がニジェール国に及ぼしたと考える影響について対象ごとに記載してください。

A　対象地の住民

内　容：

・外国のプロジェクトチームが物を与えに来たのではなく自分たちが生活し易いようになる工夫をしに来たというのは理解してもらえたと思う。

・植林分野のことが中心になってしまいますが、植栽技術の知識の取得、植林による樹木の利用方法の多様化。

・プロジェクトの存在の意義を理解し、我々と積極的にかかわりあってきた農民達を中心に少しずつ自主的に物事を考え、進めていく取り組みが見られるようになった。村内で指導的立場にあたる住民が現れ始めた。

・「日本」とか「日本人」をよく知るようになった。

・「(けちなプロジェクトはあてにならないから) 自分達で何とかしよう」という意識が少しは出てきた。

・植林活動を通じた環境改善活動への関心を喚起。(ソンガイ、ザルマ)

・個人主義的農業活動形態から緩やかな集団的相互扶助形態への移行。(ソンガイ、ザルマ)

・タマネギを中心とする現金収入を目指した野菜栽培活動の促進。(プール、その他)

・定住生活を基本とした農耕形態の定着と組織的生活改善運動の促進。(プール、その他)

・援助に頼らず、まず自らが頑張ってお金儲けをしようという思想、そして植林等で環境を守らなければ生活が将来脅かされるという思想が育ったと思う。

・生活環境の改善、向上と言えども今までの仕事ではない仕事を増やしてしまったと考えることがあった。

・結果・評価が出る前に帰国したため、影響に関しては判断できません。

・何よりも日本人とのチームワークができつつある。話し合いぶつかり合ったりしたが、今後、継続していく上で大切な意味がのある時間だったと思う。

・活動当時は遠くから見ていた住民が年を重ねるごとに興味を示してき、積極的に活動依頼をするようになってきた。自分達で問題に気づくようになった。また、政府に頼らず自分達である程度の活動ができると認識したのではない

か。

・日本または日本人についての知見を得た。

・対象地の住民へは多くの情報を与えてきた。このことで大きな影響があったように思う。もっと大きなものは土地の利用性の増大で単位面からもっと高い生産性を出し、近郊という地域条件をわかってもらった。また、多少環境感をわかってもらった。

・砂漠化防止、緑の推進まで理解しているとは言い難いが、樹や緑に対して関心を持つようになったと思う。生垣になってからは死垣のように毎年木を切ることもなくなっただろうし、そのことによる緑の伐採も少なくなったはず。

・日本という国がどういう国かわかったと思われる。

・経済的な状況の向上。

・生活改善

・活動を共にした住民には具体的にかまどを作ったり、植林したり、という生活改善に直接影響を及ぼしたと思う。

・新しい技術、栽培などに取り込めた（ただそれを受入、今後継続していくかは別問題）

・日本人がどういう人なのかということを知ることができた。

・お金をかけなくても工夫次第で生活を改善することを学んだと思う。あらゆる面において村人の意識が向上したことも大きい。

・目に見える形では、植林の生垣、改良かまど、接木果樹、ガルミオニオン等である。村の人たちにとって日本人はほぼ始めてであったと思う。日本から来た海の物とも山の物ともつかない若者といろいろ活動をした村人の異文化体験も成果ではないだろうか。

・果樹の分野においては、主に興味を持って参加してきた農民には、苗木の販売利益からそれなりの収入変化があり、生活向上がもたらされたと考える。また、年間約５万本の植林苗の配布は、生垣や家畜道などの植林形態で植えられ、農地の保護や薪炭材の収穫などに直接効果があったと考えられる。

・プロジェクト開始によって住民が直面している問題について意識するようになった。自分たちが具体的にどのようなことをしていかなくてはいけないかを理解した。

・多くの住民がプロジェクトの存在理由を理解し、緑化を目にしたことと思います。その中の意識ある人々は自らの意思で立ち上がり、様々な活動に手を汚し。緑化に参加しました。

B　対象地の近隣住民

内　容：

・となりではこんなことをやっているので少しまねをしてみようかぐらいには思っていると思う。

・優良事例からの波及効果

・ナマルデ郡の中心的な役割を果たしていたナマロ村は当初、プロジェクト対象地域とは書かれていなかったが、以前の野菜栽培の隊員が派遣されていたことや農業改良普及員（現地公務員）らと共に普及啓蒙活動を行ない、住民や村内の小学校などもプロジェクトと関わりを深めていった。

・「日本人」と「中国人」とは違うということを知らせた。

・日本人による農村開発援助活動紹介。

・車輌を使った緊急時支援の実施。

・地域活性化への期待を持たせた。

・あまり影響はないと考えます。

・結果・評価が出る前に帰国したため、影響に関しては判断できません。

・個人的に「プロジェクトの向こう側、こっち側」という資料を作った。人口調査と位置関係などを中心に行なった。

タマネギの活動はよく知られていたので、種の入手方法などを聞かれた。

・木を欲しがっていた。

・地域住民にとっては対象地の境界はないわけで、多いに興味を示し、いつプロジェクトの人間が村に来るか待っている。見聞により真似ている住民がいるのではないか。

・近隣住民へはこのプロジェクトがありけっこうな成果をあげていると言うことは知っておりそこまでの影響ではないかと思う。

・サイト外、特にナマロより先の地域は以外と緑がもともと多いと思うので、もしかしたらあまりプロジェクトの活動について興味がないのではと思う。

・市場へのプロジェクト産品の流入。

・プロジェクトの効果、その技術などを導入（模倣）。

・わかりません。

・少なからず影響はあったと思う。

・興味を持たせた。

・プロジェクト活動対象以外の地域については、その存在は知っていても、何も変化はなかったと思われる。

・首都ニアメに近い村では商人による果樹の苗木や野菜の買い付けなどが見られた。また、市場においても彼らの農産物などが農民同士で売買され、近隣住民への影響はそれなりにあったと思われる。

・植林隊員の観点から言えば、近隣の村でもボヒニアを利用した生垣のことを知っているなど、日本人のプロジェクトが何かやっているというレベルでは影響を与えた。

・プロジェクトサイトに足繁く通うようになり、周辺地域からもデモンストレーションの依頼がくるようになった。市場で住民同士が情報交換しており、プロジェクトの内容がサイト外にも知られてきた。

・木々が大きくなるにつれ、その効果かを目にするようになり、緑化への啓蒙になったと思われます。

C　郡レベル

内　容：

・他の国のプロジェクトがこんなことをやっていると知ってもらえる程度のような気がする。

・プロジェクトは本来、行政サービスとして行なわれなければならないことを行なっていたと思います。しかし、現地森林官、家畜指導員等を巻き込んで行なっていたので、彼らの経験は今後、彼らの仕事にきっと役に立つと思います。予算があればの話ですが。

・ラモルデ郡、ナマルデ郡がプロジェクト活動対象地域であったため住民のみでなく同地区を担当していた公務員を通してプロジェクトの存在をアピールできた。

・ニジェール川流域の砂丘地帯における環境保全型農業開発の実例を紹介。

・あまり影響はないと考えます。

・結果・評価が出る前に帰国したため、影響に関しては判断できません。

・コロ郡に関しては、国立農業研究所コロ研究所と私は個人的に付き合っていたがプロジェクトのことはあまり知られていないようだ。ナマロ小郡、ラモルデ小郡では日本のプロジェクトとして認知されている。

・そこまで知る時間的余裕などほとんどなく仕事してました。

・特に影響はなかった。

・もしこのレベルでプロジェクトの報告書などの情報が伝わっているのであれば、こういう事例があったという情報があるというぐらいの影響であると思う。

・よくわかりません。

・プロジェクトと共に活動している森林官、家畜指導員を通じて何らかの影響は与えているかもしれない。
・影響があったとは思えない。ただ、カレゴロの地域ではこのようなプロジェクトがあるということは知っている人もいる。
・よい見本となった。
・コロ郡とのつながりがそこから駐在している現地森林官との活動のみであったため、彼らが技術援助という新しい協力活動のカテゴリーを経験できたことは大きかったと思われる。
・こちらが近隣の村々へ調査及び視察に行ったりすることはあったが、向こう側からのアプローチは特にまだあまり見られなかったと思う。
・プロジェクトサイトに配属されている森林官や農業改良普及員が月１度郡庁のある街に出かけ(会議)、その場でプロジェクトの活動が紹介され、郡内他地域にもプロジェクトの存在が知られるようになった。
・私達の活動の成果は語りつがれると思います。

D　県レベル

内　容：

・他の国のプロジェクトがこんなことをやっていると知ってもらえる程度のような気がする。
・プロジェクトは本来、行政サービスとして行なわれなければならないことを行なっていたと思います。しかし、現地森林官、家畜指導員等を巻き込んで行なっていたので、彼らの経験は今後、彼らの仕事にきっと役に立つと思います。予算があればの話ですが。
・ティラベリ県内やニジェール国内全体に及ぼした影響というのは余りないように思う（スケールが大きすぎる)。
・多少知名度あり。開発援助関係者が植林分野活動の見学を実施。
・あまり影響はないと考えます。
・結果・評価が出る前に帰国したため、影響に関しては判断できません。
・ティラベリ県、ことに AXE　DANBOU　FAIRE（プロジェクトサイトの道路）沿いの人達には日本のプロジェクトはよく知られており、植林の生垣などは有名で真似する人もいるそうである。
・そこまで知る時間的余裕などほとんどなく仕事をしていました。
・特に影響はなかった。
・もしこのレベルでプロジェクトの報告書などの情報が伝わっているのであれば、こういう事例があったという情報があるというぐらいの影響であると思う。
・よくわかりません。
・影響があったとは思えない。
・よい見本となった。
・つながりが皆無のためプロジェクト活動がどれだけ影響を与えたかは測りようがない。
・こちらが近隣の村々へ調査及び視察に行ったりすることはあったが、向こう側からのアプローチは特にまだあまり見られなかったと思う。
・県レベルではどのような情報交換が行なわれているのか定かではない。
・あまり影響なし。

E　国レベル

内　容：

・他の国のプロジェクトがこんなことをやっていると知ってもらえる程度のような気がする。

・国レベルの植林計画を立てる際、カレゴロの経験から個別の農家を対象とした小規模植林アプローチ手法の有効性を実証できた。
・ティラベリ県内やニジェール国内全体に及ぼした影響というのは余りないように思う（スケールが大きすぎる）。
・金を出さないプロジェクトもあることを知らしめた。
・政府水利環境省環境局を通じて砂漠化対策プロジェクトとして認識される。
・あまり影響はないと考えます。
・結果・評価が出る前に帰国したため、影響に関しては判断できません。
・「緑のプロジェクト」の名前でガルミオニオン切手を発行する計画を立てたが、予算の都合で実現できなかった。タマネギの国として世界にアピールするチャンスだったが私の実力不足であった。
・知りません。
・特に影響はなかった。プロジェクトの活動について、本省が十分に把握していない。延長にあたり、個人的に隊員、専門家に対しセミナーの開催を提案したが実施されたか不明である。ニジェール国内において JOCV のプロジェクトについて知っている政府役人はあまりいない（1999 年時の記憶ではいなかった）。
・国へはあまり影響がなかったと思う。あると思えば環境局のスタッフが何回もプロジェクトサイトの現場を見てくれて、現場の村人の話を聞いてくれたこと。
・よくわかりません。
・日本のプロジェクトの認識（テレビプログラム、大臣の来訪など）。
・専門家を通してプロジェクトの活動は理解してもらっていると思う。
・影響があったかわからないが。興味を持ってくれているとは思う（そうであってほしいという願望も込めて）。
・よい見本となった。
・プロジェクトの存在自体が国レベルでは知られていないためよくわからない。
・地域で植えられた苗は飛砂の防止、砂丘固定、気象の緩和など国レベルで広い意味での環境保護的な効果を果たしていると思われる。
・農牧省大臣がサイトを訪れるなど農牧省全体でも注目を集め始めていた。
・あまり影響なし。

3．活動期間中の事務局の支援体制は満足いくものでしたか。下記のうち該当するものを 1 つ選び、その主な理由を記載してください。

A　満足している　　：　3

理　由：

・当初の予定よりかなりプロジェクトの内容が変更したにもかかわらず、現場のサイトの情報に理解を示していただいたため。
・支援体制については意見はあるが、それ以上にクロスロードや報告書など何人の方がそのたびに手紙をくれたり、FAX をくれたりした。本当に励まされた。我々隊員は本当に多くの人に支えられていることを痛感した。
・支援体制について特に不満はなかった。評価ミッションで来られる方々はプロジェクトの報告書や資料を良く読み、真剣にプロジェクトの今後を見据えていたと同時に、我々の考えをよく汲み取ってくれようとしていたと思う。

B　まあまあ満足している　　：　8

理　由：

・果樹の職種の後任がいずに切れるところを短期派遣ででもつないでくれたところは良いと思う。それ以外に特に目

立つところはない。

・後続隊員の派遣に対して、調整がつかなかったり、隊員の資質に問題あったりしたが、特に不都合は感じなかった。

・派遣されてくる隊員に対してはチーム派遣であるという認識を十分に自覚させる必要はあったと思う。両者の了解がなければ後々問題が起こる。

・担当が頻繁に交代し、内容を把握していないということがあったと思う。プロジェクト期間中は担当が変わらないほうがいいと思う。

・事務局へは国内支援小委員会など開いていただきプロジェクトへのアドバイス等を送ってもらって感謝している。欲を言えば毎月提出している月例会のレジメ等へのコメントなどをいただけるとかしてくれるとよかった。また、もう少しプロジェクトサイトと事務局とか交通を持って活動を進めていったほうがよかったのではないかとも思う。

・本邦購送。

・車輌、バイク、予算のとりやすさ。

・特に現状で不満は感じていないがもう少し現場への情報伝達を早めにしてほしかった。

・特に問題なかった。

・チーム枠の予算がついていたので物品に不自由することはなかったと思う。チーム内で抱える問題等が事務局サイドに届きにくいと感じた

C　あまり満足していない　　：　5

理　由：

・何らかの支援を受けた記憶はありませんが、当時の技術顧問であった浅川先生は隊員報告書毎に提言をくれました。また、こちらの質問にも懇切丁寧に答えてもらえて、たいへん参考になりましたし、日々の隊員活動の励みになりました。隊員のほうが支援してもらうようにアクションを起こしていなかった。もっと有効利用していればと、後悔している。

・物品購入に関しては比較的スムーズに行なえるかわりに、その他の面での予算の使用方法等を細かく制限された。

・時間的にも忙しくて無理なのかもしれないが、時折訪れる事務局側からの来訪者はほんの１～２時間、隊員たちと歓談を行なうのみで、首都に帰ってしまう。迎える立場としては、あまり良い印象を持つことがなかった。

・協力隊員に対する基本的活動支援体制に関してはあえて指摘する点がまったく見当たらないほどすばらしい環境を提供していただいたにもかかわらず、プロジェクト活動に関しては、隊員・専門家ともに適切な時期に適切な人材が来ないなど、改善の余地が見られる。第２フェーズに進まぬことについて、早い段階で事務局の結論が出ていたにもかかわらず、現場の隊員には１９９８年末の第１フェーズ終了時評価時まで正式に知らされなかったことは大変残念である。

・隊員へのバイク貸し出しがなくなりそうになった。あれがなくなってはできる仕事が半減するというのに。一体何を考えているのだろう。世界の現場は決して一律ではないんだぞ。

・情報伝達の遅さなど、現場サイドとの連携がうまく取れていなかったと思う。

D　満足していない　　：　1

理　由：

・かなり不満。よく理解していないし、しようともしないくせにことあるごとに無理な注文をつけたり、不愉快なことが多々あった。何しに MISSION 組んで見に来ているのか不明。金の無駄。隊員を子ども扱いするのはやめなさい。

未選択　　：　5

理　由：

・事務局のことを意識したことがなかったので、満足か不満足か良くわかりません。

・正直に言って支援体制事務局からの支援を活動に対して直接感じたことはない。だが、技術顧問からは毎回の隊員報告書に返答を頂き大変活動の役に立ち、また励みになった。

4．活動期間中の事務所の支援体制は満足いくものでしたか。下記のうち該当するものを 1 つ選び、その主な理由を記載してください。

A　満足している　　：　1

理　由：

・当初の予定よりかなりプロジェクトの内容が変更したにもかかわらず、現場のサイトの情報に理解を示していただいたため。

・月一回のミーティング及び毎日の無線連絡等で良好なコミュニケーションを保てた。

B　まあまあ満足している　　：　6

理　由：

・専門家が事務所と現地高官と隊員とコーディネーターの連絡を密にしていてくれたので、事務所は、特に問題なかったので良いということではないでしょうか。

・事務所、専門家、隊員がそれぞれの役割を果たしていたので特に問題は感じなかった。問題があったとすれば、人件費（ローカルコスト）は最小限必要な経費ではないかと思う。この点に関してなかなか理解が得られにくかったと思う。

・車輌、バイク、予算のとりやすさ。

・毎月の会計処理や植樹祭開催時の支援などでは大変お世話になりました。唯一の活動現場との接点である月例会にはもっと積極的に参加してほしかったと思う。

・植樹祭などの車の手配が必要となるときは、事務所は多いに支援してくれたと思う。厳しい環境で生活しているため、健康を害する隊員も多かったが、そんなときの MCのサポートには大変感謝している。ただし、月例報告会にはなるべく事務所スタッフ（所長、CC、MC）全員に参加してほしかったと思う。

・ニアメに近いと言うことで様々なミッションの方に訪れていただいた。そのことにより私達が見えていないことを指摘していただくなど情報交換の場を持つことができた。またプロジェクト運営の面でいろいろ協力していただいた。ただ残念だったのは隊員数の増加により日常業務が多忙なため、ミッションなどの機会がない限り事務所関係者が訪れることがなかったことである。

C　あまり満足していない　　：　7

理　由：

・毎月の月例報告会には参加してもらっていた。隊員のほうが支援してもらうようにアクションを起こしていなかった。もっと有効利用していればと、後悔している。

・時間的にも忙しくて、また、現地事務所も他の隊員の支援や、その他のいろいろな仕事があって無理なのかもしれないが、時折訪れる事務所側からの来訪者はほんの１～２時間、隊員たちと歓談を行なうのみで、首都に帰ってしまう。迎える立場としては、あまり良い印象を持つことがなかった。

・現場を見ずに隊員の気持ちをあまり考えずにいろいろ言っているように感じられた。変に過保護な部分があったり。

月例会に真剣に参加しているようには見えなかった。ミッションをすぐプロジェクトに押し付けるのも面倒でいやだった。

・プロジェクト隊員とのコミュニケーションのあり方について幅広く考えてほしかった。例えば、現地スタッフ、他国援助機関関係者なども巻き込んだ支援活動のあり方を事務所が率先して提示するなど、現状維持に終始するのではなく、協力隊員の活動可能性を拡大させる環境整備に寛容さを持って積極的に取り組んでほしかった。

・事務所が活動をやりにくくしていた期間があった。隊員がやるべきことと事務所がやるべきことがあったと思うが、隊員に負担がかかることが多い時期があった。

・車輌の問題：隊員の安全を本当に考えているか疑問。

・月例会への出席をもっと積極的に行なっていただきたかった。

・首都からのアクセスが距離比べて道が悪いのでしにくいためか、大きな行事がある以外事務所員が訪れることもあまりなかった。ごく一時期しか参加していないので詳しいことはわからないが、全般的に積極的な支援体制があったとは言い難い。単車の乗車距離制限などは活動の根源にかかわることであり、各隊員が納得するような方針を打ち出すべきであった。

D　満足していない　　：　2

理　由：

・事務所調整員がバイクの二人乗りを行ない、飲酒運転をしているのに、バイクは危険という機運が高まると、安全運転し、規則を守って乗っている隊員の活動を一方的に制限する決定がなされた。意見を言っただけなのに、他の活動についても嫌がらせのような制裁を受けた人（私も含め）が何名かいた。私も将来、国際協力の分野でやっていこうと考えているので我慢した（しばしば、もっと陰険なことをされた隊員もいた）。

・相当不満。よく理解していないし、しようともしないくせにことあるごとに無理な注文をつけたり、不愉快なことが多々あった。何しに MISSION を組んで見に来ているのか不明。金の無駄。隊員を子ども扱いするのはやめなさい。いいかげんな理解。隊員のことをコマとしか考えてねーだろ。点数稼ぎ、保身のために隊員をふりまわすのは不愉快の極み。

未選択　　：　5

理　由：

・調整員の方々にはたいへんお世話になりました。満足というよりは感謝しています。

・事務所の支援体制は車輌の維持やシキエ事務所の生活環境の整備のためのソーラーパネルや無線の設置、また、月例会への参加などやってもらった。しかし、活動に対しては深く関係してなかったと思う。そういった意味でそれが満足かどうか答えるのは難しい。唯一の不満と言えば新しい車輌（NIGER　CAR）が来るまでに時間がかかったということぐらいである。

・どちらともいえない。プロジェクトと事務局間の書類などの授受、機材の貸与、植樹祭事の車輌提供。

・プロジェクトの金銭面に関して事務所の人たちがあまりに知らなくて驚くことが多い（給与関係など）。

・プロジェクト車輌に関して、対応が遅かったり隊員の安全を本当に考えているか疑問に思うことがあった。

5．活動期間中のニジェール国の支援体制は満足いくものでしたか。下記のうち該当するものを１つ選び、その主な理由を記載してください。

A　満足している　　：　0

B　まあまあ満足している　　：　8

理　由：

・専門家が事務所と現地高官と隊員とコーディネーターの連絡を密にしていてくれたので、事務所は、特に問題なかったので良いということではないでしょうか。

・特になにも支援体制はなかったと感じている。

・プロジェクトコーディネーターのコビカ氏をプロジェクトに派遣してくれたことでプロジェクトは大変うまくいったと思う。また、現地森林官や家畜指導員のスタッフもたいへん協力的でプロジェクトの活動を助けてもらった。そういう面での支援は満足である。しかし、現地森林官の移動が多かったという面では不満であった。プロジェクト期間中３回も交代があり、そのつどプロジェクトの説明をし、理解してもらう必要があった。

・優秀なカウンターパートの供給。

・プロジェクトの活動上、何の支障もな感じていないので不満等はない。ただ、もう少しプロジェクトに対して興味を示してほしかったと思う。

・専門家が派遣されていることで「ニジェール国政府を迎える」ということができたことが大きい。我々隊員側とニジェール国側との接点が少ないようにも感じた。が、隊員側が積極的に接点を持とうとしなかったのも原因の一つである。

・プロジェクト運営に関し、まったく日本人任せであった。もっと所属省庁との連携ができていればと思う。環境局の職員がプロジェクトに足を運ぶということは皆無であった。

・農業牧畜省よりカウンターパートが１名配属されていた。彼を抜きにしてプロジェクトは語れないほど仕事に熱心であり、この点では多いに満足できるものであろうが。カウンターパートの給与、その他の人件費、車輌、燃料代等は一切 JOCV もちであった。

C　あまり満足していない　　：　7

理　由：

・環境局から出向してきているプロジェクトコーディネーターのコビカ氏は良く働いてくれていた。

・現地森林官をころころ変えるのはやめてほしかった。現場を見ずに口だけ出す公務員がいて、少々腹が立った（でもコビカ氏はすごい人だ）。

・ほとんど関わりがなく、判断不可能。もう少しニジェール政府を巻き込む形でプロジェクトを進めていけば良かったと思う。が、実際には治水森林省、農業省等に十分な予算がなく、また、公務員の給料遅配等により公務員のモチベーションは低く、期待できない状況にあった。

・そういう国だと思ってたから何も期待してませんでしたが。

・あまり関わりをもてなかったから。

・実際のところ我々隊員自信がニジェール国政府と接触することは少なかったように思う。現在はニジェール国水利環境省のプロジェクト担当の方を月に一度招いて報告会を実施するようになり、少し接点を持ち始めている。活動中はそこまで気をとめる余裕がなかったがニジェール人のプロジェクト担当と日本人隊員が半々くらいで働ける環境が望ましかったと思う。なぜなら、我々は農民とともに活動することを主体としていたが。プロジェクトが終了した後もそこで村をまとめあげる、きちんとした役人がやはり必要だからである。

・もともとニジェール政府の関係度は薄かったため、支援と言う支援を受けてはいなかった。だが、KOBIKA 氏と言う優秀な人物をプロジェクトのために割り当てていただいたことはプロジェクトの活動になくてはならないものだった。

D　満足していない　　：　3

理　由：

・現地公務員（森林官、農業改良普及員、家畜改良普及員等）と直接関わりながら活動を行なってきたが、彼ら個人との連携のみで、ニジェール政府側からの支援というものは記憶にさえない。

・Hamidou　KOBIKA 氏という類まれなエキスパートをコーディネーターとして提供してもらえた点は評価に値するが、他方では人材不足・資金不足を反映させた対応に終始し、公式評価に際しては、プロジェクトの貢献度よりは問題点を積極的にとりたてて指摘するあたり、まだまだ改善すべき点があると思われる。今後の発展に期待したい。

・よくわかりません。隊員との直接の関わりはほとんどなかったと思いますが、専門家を通して本当はいろいろと支援されているのかもしれません。それさえもあまり感じることができませんでした。

未選択＆その他　　：　4

理　由：

・ニジェールの支援が必要と感じたことがなかったため、満足、不満足の区別がない。

・記入できない。公務員の給料も一年以上未払いの中で、国立農業研究所（INRAN）の技官などは休日を利用して協力してくれたり（ボランティアで）、個々には熱心に協力してくれたが、支援体制はというと満足してないというより仕方がないと感じる。

４－２－２　アンケート結果：専門家

専門家に対してはチーム派遣及びプロジェクトに関する質問を実施した。

Ⅱ．チーム派遣に関する質問

１．専門家(もしくはシニア隊員)と協力隊が組む形のチームで派遣することの得失は何だと思いますか。

・専門家の存在がややもすると個人プレーに走りがちな隊員たちの核となって、チームとしてのまとまりが生まれる。

・隊員の交代によってとかく振り出しに戻ることの多い活動の内容に一貫性を持たせることが可能になる。

・若い隊員たちの代表者と専門家とでは、相手政府の関係者に与えるインパクトが違うことがしばしばある。

・個人プレーを抑制され、前任者の活動の踏襲や深化を期待されるうえに、現場では具体的な活動など行っていないにもかかわらず代表ずらして... と、専門家の存在がうとましくなる隊員が現れると、その実際の能力の有無に関係なくぎくしゃくした状態を招き始めることがある。

・いい点はチームで何か決めるときに、専門家という違う立場の人間がいることで客観性が与えられる。そして、対事務所の折衝において適切な発言力が確保できる。

・悪い点は専門家がリーダーシップを取りすぎたとき、隊員の連携がうまく行かなくなる。つまり、お互いの目標点がそもそも違うので、常にばらばらになる危険性をはらんでいること。

２．今後、カレゴロ緑の推進協力プロジェクトと同様のプロジェクトを実施する場合、派遣形態について下記のうち妥当と考えるものを１つ選び、その理由を記載して下さい。

A　専門家と各種の隊員が組んだこのようなチーム派遣がよい　：　2

・個別の職種を担当している隊員たちには、特にチーム全体に関わる年間報告書の作成や翻訳、資機材の購入のための業者との折衝などを始めとする煩雑な事務に携わることが、その業務の遂行上大きな障害となることが多い。全体のリーダーとして活動の内容を把握し、指導して行きながら、一方では裏方となって隊員をサポートもしていく専門家の存在は個別の活動には直接は携わっていなくても、チームの大きな戦力であるし、１で掲げた理由からも、隊員だけのグループや個別派遣に比べるとメリットがあるように思われる。

・隊員だけのグループ派遣ではまとまりがつかなくなるのは自明である。また、関連する専門の個別派遣ではグループ派遣としての成果をだせにくい。したがって、グループ派遣の特徴を活かすためには、まとめ役の専門家などのリーダーが必要であるため。

B　隊員だけのグループ派遣がよい　：　0

C　関係する専門の隊員の個別派遣がよい　：　0

D　どれとも言えない　：　0

３．事務局が将来チーム派遣を行なう場合、提案がありましたら挙げてください。

・活動内容、その手法、期待される成果について事務局も明確に把握しておくべきである。

・現場での実情の把握について、定期報告書や現地事務所を経由しての情報とは別に直接的な形でリアルタイムに行える体制(人員)を事務局内に確保・確立すべきである。

・現場には事務局の顔が見えず、事務局には現場の声が届かない。そのような実情をいかに改善していくか、インターネットのこの時代、最大限の活用を図っていくべきである。

・専門家の権限を明確にすることと、チームとしての要望(交代隊員の確保、柔軟な任期延長の決定など)がしっかりと確保できる体制をプロジェクト設立時に造る。

4．専門家任期中、協力隊員チームとの活動での問題、障害等について挙げてください。また、その解決のためにとった手段や方法についてお書き下さい。

・数ある隊員のその中には資質や能力に欠ける隊員が混在することは否めない。しかしそのようなケースでも２年の任期の間に必ず、それなりの能力を発揮できるようになる。そのためにあれこれと助言したり激励したり、活動の環境整備を図ったり、とにかく子どもを育てるようにして向き合うことが必要であった(これはセネガルでの話であるが、折角苦労して開発した斬新かつ画期的な手法を専門家が去って不在になった途端に次世代の隊員と調整員とによって元の木阿弥にもどされたことがある。３年間の思考錯誤と２年間の実績が水泡に帰した。一つの手法と理念とを大切に守りながら改善を施して行くことは、我の強い協力隊のチームではなかなか容易なことではない)。

・協力隊は経験や語学などのレベルで現地スタッフや地域住民ともめることが多かった。一生懸命にやるために、周りの状況を無視してしまい、現実的な対応ができなくなることがある。そういう時は、協力隊の特性を十分理解してもらい、協力隊の方にも謙虚な対応を求めた。

Ⅲ．プロジェクトに関する質問

1．プロジェクト活動は成果があったと思いますか。下記のうち該当するものを一つ選び、その理由を記載して下さい。

A　成果があった　　：　2

・当該プロジェクトの任地で、住民参加人数の増加に見られるように、その存在が村民の生活の中で、確実に根ざしていったこと。

・最後まで、隊員のまとまりが崩れることはなく、グループ派遣の形態を維持でき、その中で、青年育成と言うJOCVの目標が達成できた。

・担当機関である水利環境省の評価が常に高かった。その結果、日本のプロジェクトに対し、信用を勝ち取ったこと。

・プロジェクト開始当初に各活動分野は数字で表せる具体的な目標達成が示されていないので、目標達成を指数で表すことは困難であるが、95年頃より隊員の活動は着実に具体性を帯びてきて、最終年度においてその数字は現況のプロジェクト戦力で達成し得る最大の成果をあげたと考えている。ただし、啓発活動に関しては現時点で一定の成果はあげているが、最終的な判断を出すには時期尚早と思われる。

・青年育成：農業分野の隊員は新卒者が多いため、受入と派遣側は活動を通して一人の社会人を育てる意識が不可欠と考える。特にJOCV後も国際協力分野で活動を希望する隊員が多いことから、第一にこの分野の日本での社会復帰を念頭に置いた関係者の一層の指導が望まれる。

B　一応の成果があった　　：　1

・緑のプロジェクトはその成果が具体的に現れてくるまでに時間がかかるプロジェクトであった。そのために私個人としては任期の関係でその成果が見えかかってきた時点での帰国となったこともあり、Aに丸するだけの根拠を持っていない点だけがくやまれる。勿論、各種の活動のそれぞれの分野によって成果の急速に上がってきたのが目に見えるもの(生垣、改良かまど、ガルミオニオンの普及など)と依然として遅々とした動きしか見えていないもの(カレタジ菜園、直播き植樹など)ばらつきがあることは確かである。しかし、ニジェールの政情や地域の民情の持つ困難さを考慮すれば、一応かそれ以上の成果があがったと思わないではいられない。

C　あまり成果がなかった　　：　0

D　成果がなかった　　：　0

2．プロジェクト活動がニジェール政府に及ぼしたと考える影響について対象ごとに記載して下さい。

A　対象地の住民

・個人主義、独立独歩に気風が強く、集団活動を好まない風潮の強い中、プロジェクトはいくつかのサンプルを成功させ、その模倣、追従を自発的に生み出すだけの影響を住民達に与えている。

・農業技術の向上。組織化の必要性の認知。森林の大切さ。他の地域への関心。日本人への関心。

・住民がこれまでに受け入れていた活動と比較して、形式が大きく違っていたので活動当初戸惑っていたが、最終的には一部の住民を除いて、大多数の参加を得られて住民の生活が改善されたことによって、活動への住民の積極的な参加を得る機会が増えたと考える(しかしまだ不十分)。

B　対象地外の近隣住民

・俺の村にも来てくれ言う声はしばしば耳にした。しかし、対象地域の村々でのような活動の展開は不可能であり、断片的な接触でしかないために、どのような影響があったかわからない。

・日本のプロジェクトの認知。農業技術の情報。
・ナマロにみられるように、プロジェクトと近隣住民を結ぶキーパーソン(現地森林技師補等)が存在する場合はプロジェクトの活動に間接的に参加して大きな成果を得られるが、住民のみでのプロジェクトとの関係作りは現況では困難であって、影響は具体的な形では殆ど出ていない。

C　郡レベル
・プロジェクトの候補地選びの段階から懸念されて来た通り、郡森林局との地理的、物理的な隔絶と、前局長との理念・手法の相違がたたって十分なコミュニケーションができたとは言い難い。しかし、局長の交代があってから後には、仏文の報告書の提出や視察を通じてこのような地道なプロジェクトがあるのかと新局長は深い理解を示してくれた。
・日本プロジェクトの認知。砂漠化防止対策の必要性。
・隊員との活動をともにしている技術者３名は１名専属コーディネーターを除いて郡の出張所に勤務しており、彼らを通じて指導者のレベルアップとナマロに見られるような具体的な影響を与えたと考える。

D　県レベル
・郡レベルと同様、ニジェール河の対岸というハンディーが災いして、十分な活動内容や成果の提示が困難であった。専門家による仏文年間報告書の提出や口頭での県局長への説明だけではインパクトも弱く、さしたる影響を与えることもなかったのではあるまいか。
・日本プロジェクトの認知。砂漠化防止対策の必要性。
・このレベルでの接触は儀礼的な訪問や調査聴き取り以外に面談していないので直接の影響は不明。

E　国レベル
・カウンターパートや課長クラスの人物には相当な影響を与えたものと思われる。プロジェクトの理念と手法が斬新なものであり、地域住民のニーズに主体を置いていることは彼らにとっても瞠目すべき活動として認識されている。他の地域への基本的な手法の導入や自身による展開を語る声も聞きはするが、いかんせんその絶対数の少なさは覆い隠すすべもない。
・日本プロジェクトの認知。砂漠化防止対策の技術と必要性。日本の協力スキームへの理解。
・この国での一般的な砂漠化防止の方法と比較して、一番最初の住民との関わり方から全く違った方法を取り入れて、住民の衣食住と密接な場面(生垣、街路樹、薪炭材の節約、日陰樹、果樹、野菜等)で具体的な成果(間接的ではあるが砂漠化防止に多大な成果をあげた)を示したことで所属した省の評価も高い。今後この方式を援助の形式によっては政府は積極的に取り入れると考える。

３．活動期間中の事務局の支援体制は満足いくものでしたか。下記のうち該当するものを１つ選び。その主な理由を記載して下さい。

A　満足している　　：　0

B　まあまあ満足している　　：　2
・少し不満に思ったのは、一番大切なプロジェクト期間について、フェーズ２をやる前提で活動してほしいと派遣前に言われたのにも関わらず、２年半の延長になった。その主な理由をして、活動は高く評価されつつも、JOCV のスキームにあわなくなったということであったが、もしそうなら、最終評価ミッション時ではなく、もう少し早い

時点で教えてほしかった。なぜなら、常日頃、フェーズ2をする事を前提に隊員に接し話していたから。
・こんなもんですか。現場の状況にタイムリーに反応できる体制よりいいかも？方法は国内支援委員会の体制を改革して一層有効に利用するのも一つの方法かも？

C　あまり満足していない　　：　1
・もっとバリバリ活発に様々な意見交換がしたかった。私達の活動の実態を担当課の職員がどうとらえているのか全くと言って良いほど顔が見えなかった。予算面での措置や人員の確保のために腐心していただいたことに対して深く感謝はすれけれども、隊員達とだけでなく。チームリーダーの専門家とももっと頻繁な意見・情報の交換がほしかった。このことは専門家の所属する JICA 本部の担当も同じことで、長期的、中期的なビジョンが感じ取れないことにイライラさせられ続けて来た。支援委員会の先生方の派遣やアドバイスには多いに励まされたけれども、先生方の個々人として意見以上に、事務局そのもの意見や考えをもっと聞きたかった。

D　満足していない　　：　0

4．活動期間中の事務所の支援体制は満足いくものでしたか。下記のうち該当するものを1つ選び。その主な理由を記載して下さい。
A　満足している　　：　2
・所長の個性によるものであろうが、プロジェクトには最大の便宜を図ってくれた。私の在任中、専門家を通じて申請した事項に関してはほとんど無条件で通してくれたし、非常にやりやすい環境を作ってくれたと感謝している。ただ一つ、広報面での弱さが(専門家を含めて)あった点が反省される。もっと JOCV の緑のプロジェクトを大々的に売り込んでいく姿勢が必要であったかもしれない。しかし、やはり成果の見えない足踏み状態の段階ではプロジェクトの内容整備の方が先にたって、広報にまでは手を広げるには至らなかったと言うのが実情でもある。
・隊員の任期延長や、バイクの貸与など様々な制約のある中で、常識的に誠実に対応してくれた。隊員は満足してないようであったが、それは致し方なかったように思われる。

B　まあまあ満足している　　：　1
・現状の勢力では積極的にプロジェクトに関わり合うのは難しいのでは？？プロジェクトを含めて、隊員の活動の成果をあげるためには、職種、地域等に応じた隊員活動評価と技術指導助言が可能な人のポストを新たに設けるのはどうでしょう？？事務局の体制も含めて、プロジェクトの全期間を通じてコントロールする所を固定する必要を感じる(JOCV プロジェクトに精通して、関係技術の情報を管理できて、プロジェクトの方向性に助言指導できる人になるべく長期間、担当者として任務についてもらう)。

C　あまり満足していない　　：　0
D　満足していない　　：　0

5．活動期間中のニジェール国の支援体制は満足いくものでしたか。下記のうち該当するものを1つ選び。その主な理由を記載して下さい。
A　満足している　　：　0

B　まあまあ満足している　　：　1

・現在の政府の現状では今の支援体制が普通である。むしろ、日本側から彼らの支援(人的)を引き出す積極的な働きかけが大切では？？

C　あまり満足していない　　：　2

・政情が政情であった上に、公務員の削減やサラリーの不払いなどとても支援を円滑にしてもらえるような状態ではなかった。それに加えて恒常的な形での人件費が一切出ない日本のプロジェクトと先方の期待する形態との間にあるギャップが大きく作用して、必要な人員の確保とモチベーションの向上につながらなかったこともあり、満足の行く支援体制を組んでもらうことなど不可能であった。それでも課長クラスの人々や接触のあった人々には精一杯、出来る限りの範囲で支援をしてもらえたと考える。

・初めからわかっていたことだが、ニジェール政府自体に力がないため、支援体制が最後までできていなかった。

D　満足していない　　：　0

4－2－3　アンケート結果：隊員家族

Ⅳ．ご家族への質問

1．ご子息／ご令嬢が青年海外協力隊員として派遣されたことにより、ご自身の国際交流及びニジェール・アフリカへの理解に変化がありましたか。あったとしたら、どのようなことですか。ご自由にご記入願います。

ア）ある　：　5　　イ）ない　：　1　　未選択　：　2

- 気候、風土の異なるアフリカ、長い歴史と伝統文化を守りながらそこで生活する人々を(人間として)支援することが国際的にどう支援あるべきかは長期的展望をふまえ大きな問題である。しかし、一方、国際的な情報化時代であり難題であろう。
- アフリカというと、暑い、貧しい、危険と言う固定観念があったが、娘の話を聞き、確かにそれは一部事実であるものの、様々な面で(特に精神的な面で)我々が普段生活している世界とそう大差がないことを知った。以前よりアフリカが身近に感じられるようになり、TV でアフリカ特集をやっていると、自然に注目してしまったりする。現在の勤め先に、フィリピンからの研修生がやってきたとき、辞書を片手にコミュニケーションを図ってみた。以前なら外国人と交流することに関心などなかったが、今では、海外の話題について娘に多々影響されている。
- 以前はニジェールという国名さえナイジェリアと間違えるほどで知識は皆無だった。視察の旅に参加して百聞は一見に如かずという強いカルチャーショックを覚えた。
- 2~3年で交代する若年層の技術援助がはたしてその国に対する真の援助になり得るか... という疑問が残る。
- 息子が協力隊に参加することになり ボランティア に関心を持ち始めました。
- アフリカ、特にニジェール・西アフリカに関するラジオ・テレビ・新聞・ニュースに強い関心を持つようになった。JICA、ODA といった日本の政府機関の活動に関心を抱くようになった。西アフリカ及びボランティア活動に関する書物を購読し、より理解を深めようとした。
- 発展途上国への援助や協力ということについて漠然としか考えていなかったが、具体的に考えるようになった。途上国の人が「自ら助くる」ことを助けることが重要だと思うようになった。
- 息子が2年間お世話になった国、人々(貧しい国ではあるが心豊かな国)について新聞、テレビでのニュースに関心を持つようになった。
- 息子よりホームステイを頼まれ、一泊していただいたこと。夕食は友人とともに楽しいひとときを... 記念に色紙、白扇に日本の風景を描いて手渡したところ帰りぎわ逆に大切な財布を頂きました。今でも大切に保管、懐かしい思い出。
- 自分の子供が協力隊に参加することによりアフリカの現状及びテレビ、新聞等に興味(気をつけて)を持ち、前よりも気をつけて世界の様子に関心を持つことになりました。

2．ご子息／ご令嬢は、青年海外協力隊員として派遣されたことにより変化したこと(人間的なこと及び人生観等)がありますか。あったとしたら、どのようなことですか。ご記入願います。

ア）ある　：　3　　イ）ない　：　2　　未選択　：　3

- 日本の高度成長期右上がり状況、バブル期に育ち、成人し社会に進出した世代である。女性の社会進出と時代はうたっていたが現実の社会、職場は厳しかった。補助事務の毎日が若いエネルギーをもてあましていたようだ。ちょうどその時協力隊に参加し後進国と言われているアフリカで隊員として充実した毎日を暮らしたでしょう。任務を終了して帰国したところ、日本はバブル崩壊、就職難であった。再びアフリカで働く機会を得た。環境への柔軟性と体力が彼女とアフリカを結びつけた。そして今は後進国の支援が国際的にどうあるべきか？大きな課

題となっているのでしょう。一方、自分の健康を保持することが大切であろう。

- 今では、日本よりアフリカを自分の居場所として考えているようである。海外で生活し、視野を広めることによって、日本を自分の活動拠点として見なくなる傾向にあるのは寂しいことであるが、自分の人生における使命をアフリカで再認識してこられたことはよかったのではないか。
- 協力隊員として経験を踏まえ、同系統の仕事に就いたことを親として評価しています。アフリカでの２年間の生活が地に足をつけた着実さ・誠実さとして身についたのではないだろうかと思っています。
- より健康的な生活志向になった(本人同様子どもに対しても)人生の送り方は一様でなく、幅広い選択肢があることに理解を深めた。
- 何ひとつ農業などしたことのない息子でしたが、海外協力隊に行きたい、行ってみたいとの一念で自ら語学、農業に関して勉強に挑戦し失敗や苦労も多かったと思われるが、自ら選んだ道、弱音を吐くこともなく頑張りとおした精神力。お陰様でしっかり自立したように思われます。
- 自らあえて金もうけとか出世などを考えず貧しい暮らしに耐えながらの２年間、これからも色んな勉強、経験をすることだろうが、将来きっと役立つと思う。人生、その人その人の生き方がある。自分の夢、目標に向かって頑張ってほしい。
- 子供が帰国して話を聞いたりして、今現在自分の置かれた生活を見ることにより心の豊かさ、物品の大事さを改めて考えさせられております。

第５章　プロジェクト終了後の対応案

５－１　カレゴロ地域活性化グループ派遣プログラム（案）

このプログラムは、２００１年6月をもって終了する「カレゴロ緑の推進協力プロジェクト」で得た成果を更に発展させると同時に、プロジェクトの活動に掲げていなかった、この地域に存在する極めて重要な問題点の改善を新たな活動目的に取り入れ、２００１年7月よりグループ派遣による活動を開始する。

尚、このプログラムは、終了するプロジェクトと同じ地域で活動を展開し、その成果を更に発展させる事を活動に含むという特別な事情から、プロジェクトの掲げていた住民の自主的な活動を支援するという姿勢を継承し、物的支援を極力ひかえる事とする。

一．要請背景

当地で7年半活動を展開して来年6月に終了する「カレゴロ緑の推進協力プロジェクト」は、植林、果樹、野菜、村落開発の各職種が一定の成果を上げて、惜しまれつつプロジェクトは終了する事となった。しかしながら現地では更なる活動の継続が望まれている事となんらかの形で現在の活動をフォローする必要性が認められる事、それに現地からの新たな要望に鑑み今までの活動に他の分野も加えた、より積極的且つ住民生活に密着したプログラムを計画した次第である。

カレゴロ地区の中心部は首都ニアメから２０キロ程度の距離で、車で一時間以内に到着する一般的には都市近郊と呼ばれる地域である。しかしながら、その生活環境の実態は極めて劣悪である。例えば幹線道路の橋は流失しており雨季には一時的に交通が遮断し地域が孤立したり、ニジェール河沿に位置しているため害虫の発生が多く、マラリア等風土病の脅威に一年中さらされている現状がある。

また、住民は十分な教育を受ける環境になく、基礎教育不足から生活向上の機会に恵まれず、主食確保のための農業分野は勿論、保健衛生や栄養それに教育分野の基盤を早急に改善する事が望まれている。こうした状況から、この地域で隊員活動を展開する事は地域住民に生活改善の機会を与えると共に、具体的な生活向上の成果が上がり、貧困の削減や健康的な生活の確保に多大な貢献が期待できる。

一．活動期間　　2001年7月～2006年6月（5年間）

一．派遣職種

シニア隊員　　村落開発　　1名

グループの一般隊員の活動に指導助言を与え、グループ全体の成果を管理する。また、ニジェール側担当者とのコミュニケーションを円滑にして、活動を行い易い環境をつくる。

尚、シニア隊員は２００１年1月より活動を開始して、グループ活動開始の準備も行う。

一般隊員	村落開発	2名
	植林	1名
	野菜	1名
	果樹	1名
	保健婦	1名
	栄養士	1名

村落開発　改良かまどの普及
　　各種啓蒙活動への参画
　　グループ活動の調整
　　教育分野の基礎調査（識字教育他）
　　会計及び報告書等の作成または調整
植林　　直播生垣（ポピニア）造林技術の普及
　　優良在来樹保護の啓蒙と普及
　　公営苗畑の育苗技術指導
　　アグロフォレストリー園の造成協力
野菜　　玉葱（ガルミオニオン）の栽培技術普及
　　アグロフォレストリー園の造成
果樹　　苗木生産者育成
　　アグロフォレストリー園の造成協力
保健婦　衛生環境整備の啓蒙と普及（手洗い、改良トイレ、防虫技術、予防接種等）
栄養士　栄養改善の啓蒙と実施（妊婦乳幼児栄養対策、小児栄養対策、風土病予防対策等）

一．隊員の生活環境整備

住宅　住宅はプロジェクトが事務所及び仮宿泊所に利用していた、シキエの建物を整備して使用する。８名の隊員が共同で健康的に生活できるように、発電、防虫対策、寝具、浄水設備、冷蔵庫、無線等の設備を整える。冷蔵庫に関しては、劣悪な生活環境で安全な食料と、種子その他衛生物資の保存に使用する。

移動　シニア隊員は地域全域の巡回や、ニアメの所属先、JOCV 及び関係組織の事務所での協議等の業務遂行う。こうした活動範囲の広さを考慮して車両１台を貸与する。
　　一般隊員は担当村やグループを巡回する為にオートバイを各自１台貸与する。
　　また、ニアメへの移動は緊急時を除いて原則として公共交通機関を利用する。

一．ニジェール側カウンターパート

一．期待される具体的成果

野菜　玉葱生産グループを中心に、アグロフォレストリー園を造成して、安定した現金収入の確保をえる。

参考資料目次

1　森林面積統計
（1）ニジェール森林面積他
（2）ニジェール国有林概要
（3）SITUATION DES FORETS CLASSEES（森林概況）
2　気象統計
（1）年間雨量（ニアメ）
（2）年間雨量（シキエ）
（3）シキエ村における年度降水量
（4）月別気象統計
（5）1969年前後の等雨量線
（6）年次別気温統計（1990～97）
（7）ニアメにおける年次別最高気温（1990～99）
（8）ニアメにおける年次別湿度（1990～99）
（9）ニアメにおける年次別風速
（10）ニジェール及びティラベリ県の井戸数
3　野菜関係統計
（1）タマネギ栽培と生産（地域別、国別）
（2）タマネギ輸出先国
（3）ティラベリ県郡別作付け面積・収量・生産量
（4）婦人畑における98-99乾期作物別収量と粗収入
（5）乾期野菜栽培における㎡の収支表
4　村落関係
（1）村落調査結果
（2）小学校の数、男女別児童数、就学率

村落開発　改良かまどの普及
　　各種啓蒙活動への参画
　　グループ活動の調整
　　教育分野の基礎調査（識字教育他）
　　会計及び報告書等の作成または調整
植林　　直播生垣（ボヒニア）造林技術の普及
　　優良在来樹保護の啓蒙と普及
　　公営苗畑の育苗技術指導
　　アグロフォレストリー園の造成協力
野菜　　玉葱（ガルミオニオン）の栽培技術普及
　　アグロフォレストリー園の造成
果樹　　苗木生産者育成
　　アグロフォレストリー園の造成協力
保健婦　衛生環境整備の啓蒙と普及（手洗い、改良トイレ、防虫技術、予防接種等）
栄養士　栄養改善の啓蒙と実施（妊婦乳幼児栄養対策、小児栄養対策、風土病予防対策等）

一．隊員の生活環境整備

住宅　住宅はプロジェクトが事務所及び仮宿泊所に利用していた、シキエの建物を整備して使用する。8名の隊員が共同で健康的に生活できるように、発電、防虫対策、寝具、浄水設備、冷蔵庫、無線等の設備を整える。冷蔵庫に関しては、劣悪な生活環境で安全な食料と、種子その他衛生物資の保存に使用する。

移動　シニア隊員は地域全域の巡回や、ニアメの所属先、JOCV 及び関係組織の事務所での協議等の業務遂行う。こうした活動範囲の広さを考慮して車両1台を貸与する。
　　一般隊員は担当村やグループを巡回する為にオートバイを各自1台貸与する。
　　また、ニアメへの移動は緊急時を除いて原則として公共交通機関を利用する。

一．ニジェール側カウンターパート

一．期待される具体的成果

野菜　玉葱生産グループを中心に、アグロフォレストリー園を造成して、安定した現金収入の確保をえる。

参考資料目次

1　森林面積統計

（1）ニジェール森林面積他

（2）ニジェール国有林概要

（3）SITUATION DES FORETS CLASSEES（森林概況）

2　気象統計

（1）年間雨量（ニアメ）

（2）年間雨量（シキエ）

（3）シキエ村における年度降水量

（4）月別気象統計

（5）1969年前後の等雨量線

（6）年次別気温統計（1990～97）

（7）ニアメにおける年次別最高気温（1990～99）

（8）ニアメにおける年次別湿度（1990～99）

（9）ニアメにおける年次別風速

(10) ニジェール及びティラベリ県の井戸数

3　野菜関係統計

（1）タマネギ栽培と生産（地域別、国別）

（2）タマネギ輸出先国

（3）ティラベリ県郡別作付け面積・収量・生産量

（4）婦人畑における98-99乾期作物別収量と粗収入

（5）乾期野菜栽培における㎡の収支表

4　村落関係

（1）村落調査結果

（2）小学校の数、男女別児童数、就学率

1　森林面積統計

（1）ニジェール森林面積他

国土面積	1267,000 km^2	
森林面積	19,000 km^2	1.5%（全国土面積比・１９９２）
耕地面積	3,5500 km^2	2.8%（全国土面積比・１９９２）
灌漑地	425 km^2	1.2%（全耕地面積比・１９９２）
森林伐採面積	670 km^2	（1年間あたり・１９８０～１９８９）
年間森林伐採率	2.6 %	（１９８０～１９８９）
再植林面積	20 km^2	（1年あたり・１９８０～１９８９）
薪炭生産量	3,361,000 m^3	（1年間あたり・１９７９～１９８１）
	4,963,000 m^3	（1年間あたり・１９９２）

＊ FAO 他国連統計（１９９３，１９９４）

（2）ニジェール国有林概要

県	国有林数	森林面積
Agadez	1カ所	1,050 ha
Diffa	２２カ所	71,605 ha (+?)
Dosso	4カ所	17,236 ha
Maradi	１６カ所	100,900 ha
Tahoua	7カ所	11,424 ha
Tillabery	6カ所	391,005 ha
Zinder	２５カ所	16,339 ha (+?)
合計	５９カ所	609,814 ha (+?)

（約６１００km^2）

(3) SITUATION DES FORETS CLASSEES (森林概況)

Département	Nom de la forêt Classée ou protégée	Date de classement	Superficie à la date de classement	Végétation dominante	Type de sol	Situation actuelle de la forêt	Observation
	Kaoutchouloum	15/07/1976	395				
	Nagob	15/07/1976	488				
	Guidio	14/06/1977	1190				
	Bariki	14/06/1977	250	16.339	+ ?		
Niamey ②	Niamey-Aviation	16/01/1940	255	255			

21939

107.814 + ? ha (1056100 km²)

Département	Nom de la forêt Classée ou protégée	Date de classement	Superficie à la date de classement	Végétation dominante	Situation actuelle de la forêt	Observation
	Aboulboul	14/01/1956	72			
	Massouki	14/01/1956	80			
	Tsernaoua		2367	11.424		
Tillabery (6)	Say	20/01/1940	2460			
	Guesselbodi	12/01/1948	5400			
	Faira	04/12/1950	8500			
	Boumba	10/03/1953	645			
	Park national du W	25/06/1953	330.000			
	Tera	15/04/1954	44.000	391.005		
Zinder (25)	Sissi	25/03/1939	1325			
	Guirbo	25/03/1939	?			
	Kelle	31/07/1939	1670			
	Azjoumba	29/03/1941	675			

Département	Nom de la forêt Classée ou protégée	Date de classement	Superficie à la date de classement	Végétation dominante	Situation actuelle de la forêt	Observation
	Kaigam	26/01/1942	287			
	Barbekia	20/02/1942	665			
	Kissambana	14/12/1950	1880			
	Karbale	18/12/1950	950			
	Tchedia	22/12/1951	250			
	Dawambey	28/12/1951	130			
	Kongonni	21/12/1952	1840			
	Droum	13/12/1949	15			
	Korama	26/08/1952	900			
	Tounfafiram-Ouest	05/06/1953	485			
	Tounfafiram-Nord	05/06/1953	295			
	Kourabaore	12/04/1954	460			
	Boulbaram	21/09/1955	900			
	Ilbaram	14/01/1955	56			
	Goure PK 15	15/07/1976	546			
	Maja	15/07/1976	443			
	Dalkori	15/07/1976	244			

Département	Nom de la forêt Classée ou protégée	Date de classement	Superficie à la date de classement	Végétation dominante	Situation actuelle de la forêt	Observation
	Dankada	10/10/1951	5190			
	Birni lalle	27/10/1951	48			
	Guidan roumji	27/10/1951	2100			
	Dangado karazoni	21/01/1952	134			
	Dammadatchi	21/01/1952	4,4			
	Chabare	21/01/1952	795			
	Dandoutchi	08/04/1952	650			
	Kourounkoussa	08/04/1952	2300			
	Kandamo	07/06/1952	4928			
	Rignan	07/06/1952	25.6			
	Gadabeji	25/04/1955	76000			
	Bakabe	25/01/1956	2635	100.900		
Tahoua (7)	Bangui	13/12/1954	3275			
	Korofane	21/9/1955	4020			
	Tapkin-zaki	12/11/1955	1070			
	Danfan	12/11/1955	540			

Département	Nom de la forêt Classée ou protégée	Date de classement	Superficie à la date de classement	Végétation dominante	Situation actuelle de la forêt	Observation
	Kojimeri	15/07/1976	156			
	Kalgounam	15/07/1976	281			
	Gadamari	15/07/1976	86			
	Malam minari	15/07/1976	410			
	Maiganari	15/07/1976	132			
	Toubourom	14/06/1977	66			
	M`Bao	17/10/1938	187	11.605	+ ?	
Dosso (2)	Gourou bassounga	16/11/1937	10000			
	Koulou	24/12/1948	2060			
	Fogha beri	24/12/1948	4438			
	Bana	25/04/1955	738	17.236		
Maradi (6)	Madarounfa	04/08/1950	830			
	Gabi nord	04/08/1950	560			
	Gabi sud	04/08/1950	400			
	Dangado	01/10/1951	4300			

(3) SITUATION DES FORETS CLASSEES

Département	Nom de la forêt Classée ou protégée	Date de classement	Superficie à la date de classement	Végétation dominante	Situation actuelle de la forêt	Observation
Agadez	Dabaga	13/08/1954	1050 ha			
Diffa	Rabodji	13/07/1938				
	Dinia	13/07/1938	625 ha			
	Debinoa	17/10/1938	27			
	Mounouk	12/04/1939	61000			
	Ariboundourom	03/08/1939	4100			
	Loulouno	06/01/1941	1000			
	Tamsoukoua	06/01/1941	1395			
	Garoua	26/01/1942	133			
	Gadabour	20/02/1942	212			
	Garagous	20/02/1942	84			
	Kolole	23/02/1942	1120			
	Goudiou	27/10/1952	92			
	Goudoumaria	15/07/1976	72			
	Malam blamari	15/07/1976	333			
	Kayetewa	15/07/1976	94			